

# 紀要愛媛

## 第 6 号

---

香川県西方遺跡 A 地区の接合資料

—後期旧石器時代における剥片剥離の類例— …………… 多田 仁 1～10

愛媛県の盾形埴輪

—小竹 8 号墳・樹之本古墳出土の資料について— …………… 大野由美子 11～17

愛媛県出土埴輪の基礎的研究 (6)

—今治平野の埴輪資料について— …………… 山内 英樹 19～28

愛媛県内経塚覚書 1

…………… 岡田 敏彦 29～42

---

2006

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター



## 刊行にあたって

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターでは、愛媛県内において埋蔵文化財の調査研究及び埋蔵文化財に対する保護思想の普及・啓発を目的に業務を進めております。

当センターの調査成果につきましては、調査報告書にまとめ刊行するとともに、調査の概要は年報『愛比売』<sup>えひめ</sup>に掲載し、さらに発掘調査に伴う現地説明会、当センターでの速報展・テーマ展を行い、埋蔵文化財の普及・啓発に努めております。

このたび、当センター職員の埋蔵文化財に関する日頃の研究成果をまとめた研究紀要『紀要愛媛』第6号を刊行することとなりました。この研究紀要が、皆様方の歴史や考古学の研究の上で、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今後とも関係諸機関並びに関係者の皆様に、ご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター  
理事長 野本 俊二



# 香川県西方遺跡A地区の接合資料

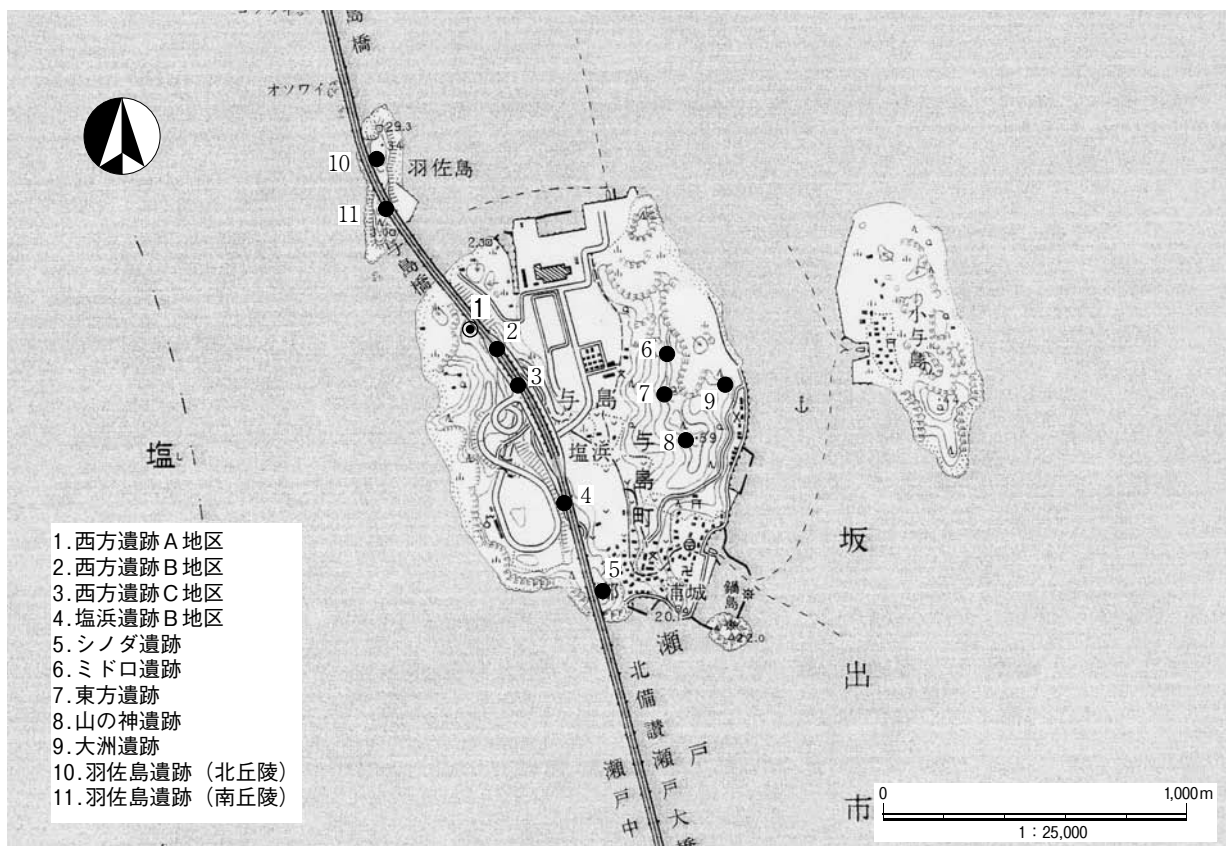
－後期旧石器時代における剥片剥離の類例－

多田 仁

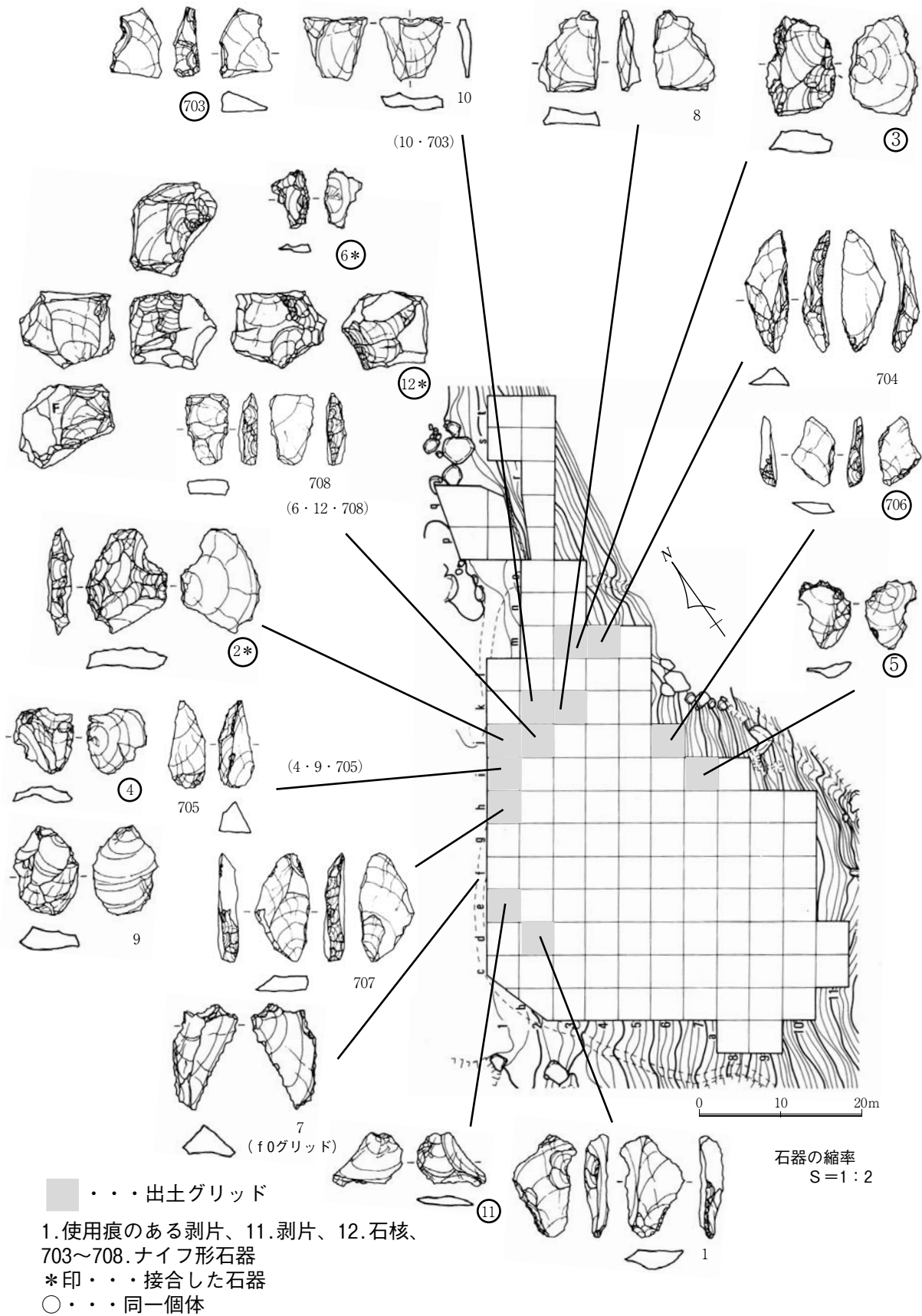
## 1 はじめに

1980年代から開始された瀬戸大橋建設に伴う発掘調査では、塩飽諸島に点在する遺跡が数多く調査され、その考古学的成果は膨大な遺物量とともに周知されている（秋山・真鍋・渡部1984ほか）。特に後期旧石器時代の遺物はその出土量が約50万点ともいわれ（廣瀬1983）、当該期の調査研究に大きく貢献していることもよく知られている。

ここに紹介する資料は、瀬戸大橋建設に関連して調査の行われた西方遺跡の接合資料で、筆者を含めた数名の地元研究者らとの資料見学中に確認されたものである。先述したように遺物の出土量は西日本の中でも非常に多いことで知られているが、接合資料については三条黒島遺跡や中間西井坪遺跡などが周知されている程度であり（森下1997・2001）、当地域における剥片剥離技術の検証に制約が伴っていたことは否めない。そこで本稿では西方遺跡で確認された接合例を紹介し、当該期における剥片剥離の様相を把握する一助として実態の把握を試みる。



第1図 遺跡位置図 (1:25000)



第2図 西方遺跡A地区における流紋岩製石器の出土状況（大山ほか1985を改変）

ここで西方遺跡の状況について簡単に振り返ってみると、1977年に行われたA地区の調査では、ナイフ形石器約3,500点や横長剥片約9,500点などを含めた約140,000点の遺物が確認され、その多くがサヌカイトを石材とするものであった(大山・藤好1985)。ここでは約140,000点に及ぶ出土遺物のうち、113,188点(約8割)について分析が行われているが、ここで紹介する流紋岩製の石器は全体で18点確認されており、石材からみる全体比では約0.01%になる。

遺物の残存状況は堆積状況が不安定なこともあり、複数時期に亘る遺物が混在した状態で出土している。したがって遺物地点分布またはブロックなどの判断には至っていない。しかし報告では層位的に問題は残るとしながらも、平面分布上は原位置に近い状態で残された可能性が高いことを示唆しており(大山・藤好1985)、当時の残存状況がほぼ残されたものと考えて良いだろう。

本稿で取り上げる流紋岩製石器について、報告書の記載を基にその様相を改めて確認してみると、遺物の多くがA地区北側の丘陵平坦面付近で集中して出土していることがわかる(第2図)。特にh2～k3グリッド付近に密な分布となっており、さらにナイフ形石器や使用痕のある剥片は集中域の周囲から出土している。接合したのは第2図の2・6・12で、これら3点はi1・i2グリッド内に近接して出土しており、このことをみても比較的原位置の保たれた状態で遺物が残された可能性を見出すことができよう。

## 2 接合資料の観察

確認された接合資料は、1985年に刊行された報告書(大山・藤好1985)の第229図2・6・12の3点(接合資料1)と、同図4・5の2点(接合資料2)が接合した2例である。なお、遺物番号は報告書の番号と同じものである。

### 接合資料1(第3図接合資料1 2+6+12)

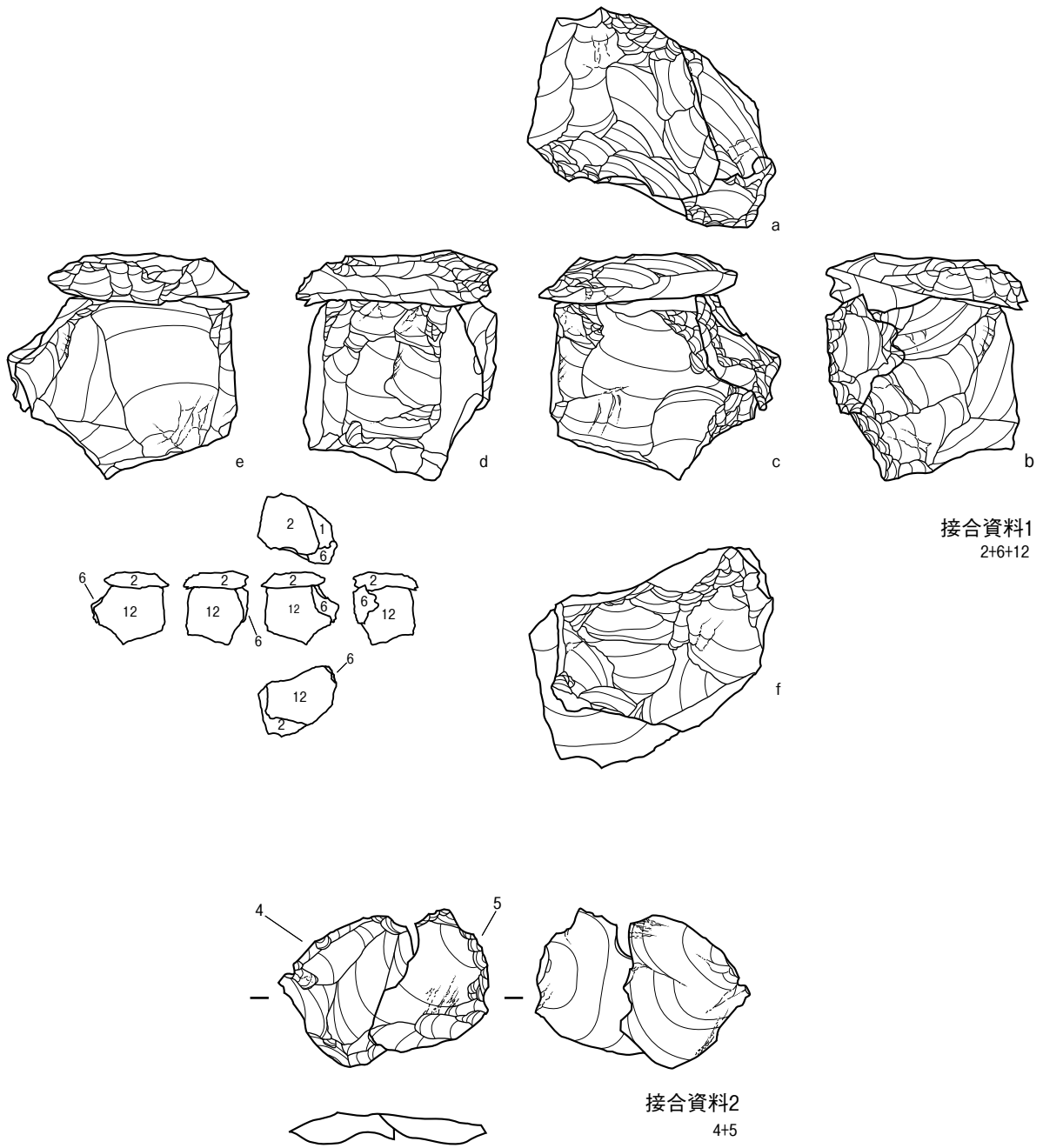
石核(12)に2点の剥片(2・6)が接合したものである。剥片2はa面に接合しており、c面側からの剥離によるものである。本体にほぼ直交し、剥片2はやや大振りなものであることから、体部調整または打面調整として剥離されたものと考えられる。剥片6はb面に接合するもので、剥片2→剥片6の順序で剥離されている。剥片6は打面側から見るとくの字状に湾曲しており、石器器種の素材となり得るような安定した剥片ではない。b面は剥片6の剥離方向と同じ剥離痕で占められ、連続的に同一方向から剥片剥離が行われたことがわかる。また、接合の状況と石核本体からみて、かなり頻繁な打面転位がくり返されていることも確認できる。

なお、これら3点の石器は隣接する2カ所のグリッドで出土したもので、約8m範囲の平面距離内で接合している。

### 接合資料2(第3図接合資料2 4+5)

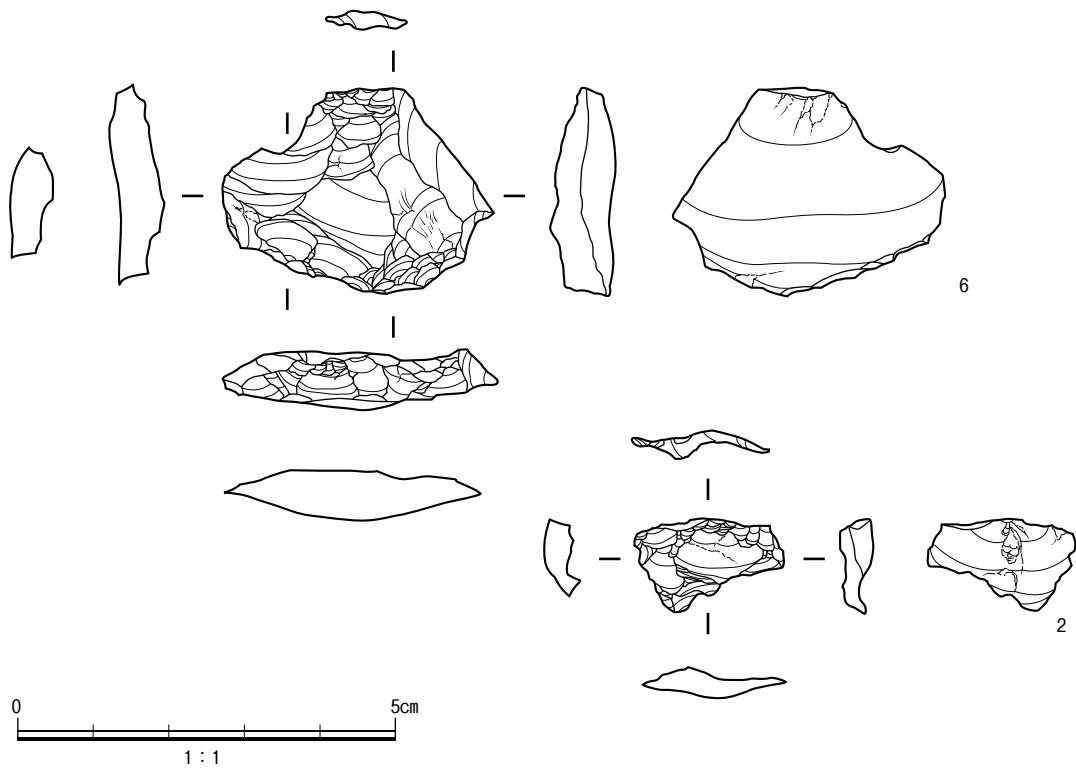
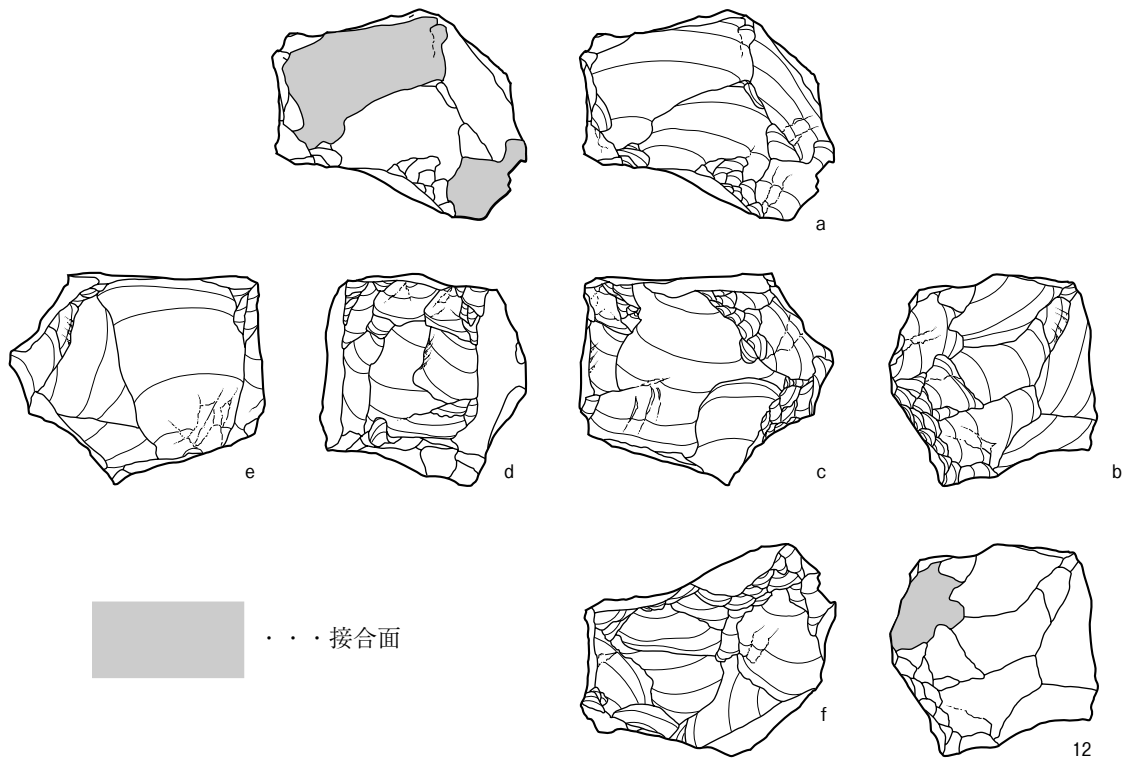
剥片2点(4・5)の接合例である。剥片4の右側部と剥片5の主要剥離面が接合しており、表面を見ると右上方からやや縦長となる剥片が剥離されていることがわかる。また、主要剥離面側を見ると、これら2点の剥片剥離においては打点を約90度転位したことがわかり、これは接合資料1に認められる打面転位の状況と一致しているようである。

なお、これらの剥片は約20m離れた2カ所のグリッドでそれぞれが出土している。



第3図 西方遺跡A地区の接合資料





第4図 接合した石器1

## 石核（第4図12）

12はブロック状の石核で、本体の前面（a～f面）で剥片剥離が行われているものである。a面の中央右（接合面）はやや平坦な剥離面となり、中央部と右側のものは階段状剥離となっている。b面には左方向から（c面側から）の剥離痕が残され、剥離状態は打角が鋭角となり、細かな頭部調整が施されている。c面では主に上方から（a面側から）の剥離痕が大きく残され、右側には下方からの剥離も認められる。d面では上方からの（a面側から）剥離痕で占められ、剥離角がほぼ90度になる。右側に残されるやや長身の剥離は階段状剥離となっている。e面には上下方向から（a・f面から）の剥離痕が残されている。左側の2枚（上方からの剥離痕）はやや平坦で素材時の分割面と考えられる。右側のもの（下方からの剥離痕）は剥離角が約90度となるもので、この石核の中では比較的大振りな不定形剥片が剥離されていることがわかる。

石核本体の観察からは、多くの作業面で不定形剥片や縦長となる剥片が剥離されていることがわかり、さらには細かな頭部調整も施されていることが確認できる。

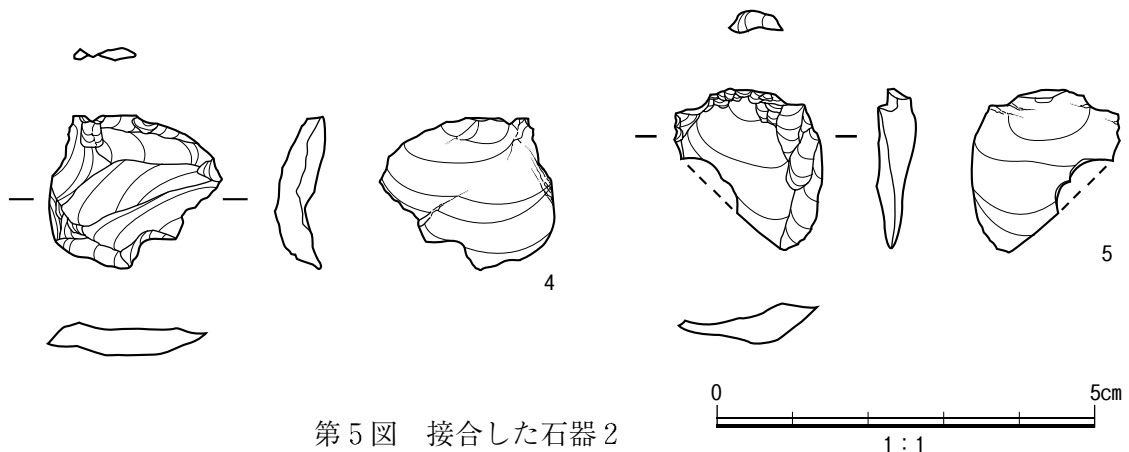
## 剥片（第4図6・2、第5図4・5）

6は単剥離打面を持つ不定形剥片で、やや横長となるものである。表面側の剥離痕は多くが打面側からのもので、下部に残る剥離痕は下方からのものである。打面部には頭部調整が、本体の周囲には素材時のエッジが残されている。なお、打面部の剥離面は接合する石核12のc面中央部の剥離痕に一致する。

2は単剥離打面を持つ不定形剥片である。表面には上下方向からの剥離痕が残され、頭部調整も認められる。下辺に沿うように残される下方からの剥離痕は階段状剥離が多く、その剥離面も細かい。両側縁には素材時のエッジが、下辺には本体に直交する剥離面が残されている。これらの剥離痕はすべて表面側からの剥離によるものである。

4は単剥離打面を持つ不定形剥片である。打面の剥離方向は不明。表面には左右方向からの剥離痕を残すもので、側面観は裏面側に湾曲する形状となる。周囲には素材時のエッジが残されている。なお、表面中央の剥離痕は接合する剥片5の表面中央部の剥離痕に一致する。

5は単剥離打面を持つ不定形剥片である。表面はすべて打面側からの剥離痕が残され、本体の周囲には素材時のエッジが残されている。左側中間部は後世の欠損である。なお、表面中央の剥離痕は接合する剥片4の表面中央部の剥離痕に一致する。



第5図 接合した石器2

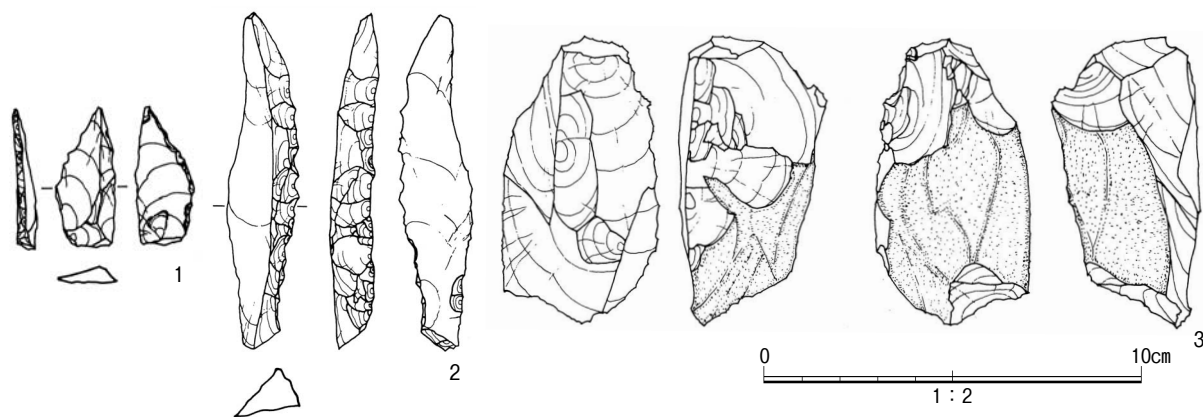
### 3 接合資料の評価

接合資料とそれに関連した各石器類の観察からは、打面転位を頻繁に行っていることや、不定形剥片を剥離していることが考えられた。さらにこれら石器の具体的な様相を把握するため、報告されている流紋岩石器18点の石器について肉眼観察による個体別分類を試みた。その結果、大山・藤好1985の第71図703・706、第229図2・3・4・5・6・11・12の9点が同一個体であることを確認できた<sup>1)</sup>。これらの器種構成を見てみると、703・706はナイフ形石器、2～11は剥片、12は石核である。こうした器種構成から見れば、この個体は剥片の生産からナイフ形石器の製作まで行われたものであると判断できる。

以上のように、西方遺跡における流紋岩製石器の一群は、ナイフ形石器の生産に関わるものと判断できた。また、その他の個体から見ても、角錐状石器、尖頭器、細石刃の生産・使用に関連したものは認められないようである。ここで、周辺地域における流紋岩製石器について簡単に振り返っておきたい。

まず西方遺跡から約3km北に位置する櫃石島大浦遺跡では、出土石器約1万点中約15点の流紋岩製石器が確認されている（秋山・藤好・真鍋1984）。器種組成をみると、大形な縦長剥片素材のナイフ形石器1点、縦長剥片石核1点が報告されている。また、近隣の花見山遺跡では約3万点の石器中約45点の流紋岩製石器が確認されており、ナイフ形石器・横長剥片石核・縦長剥片石核・縦長剥片・不定形剥片・彫器が各1点ずつ、さらに細石核が5点報告されている（西村・藤好1989）。ここで、これら2遺跡と西方遺跡における流紋岩製石器群について、その共通点を取り上げてみるならば、まず石器群の中では極めて少数であること、ナイフ形石器の製作・使用に関連していること、角錐状石器や尖頭器との関連が無いことの3点が指摘できるであろう。さらに瀬戸内技法や横長剥片剥離技術に関連した資料も認められないようだ。また、花見山遺跡については流紋岩製の細石刃関連遺物が認められていることも注意できよう。

以上の器種組成などから備讃瀬戸における流紋岩製石器の位置づけを考えるならば、細石刃段階にも僅かな使用が認められるものの、大筋でナイフ形石器段階の所産であるといえる。また、前述したように瀬戸内技法や角錐状石器との関連も認められない。さらに詳細に見ると、大浦遺跡で確認された流紋岩製のナイフ形石器は、縦長剥片を素材とした一側縁加工のものである。西



1・2.ナイフ形石器、3.石核（1.花見山遺跡、2・3.大浦遺跡）

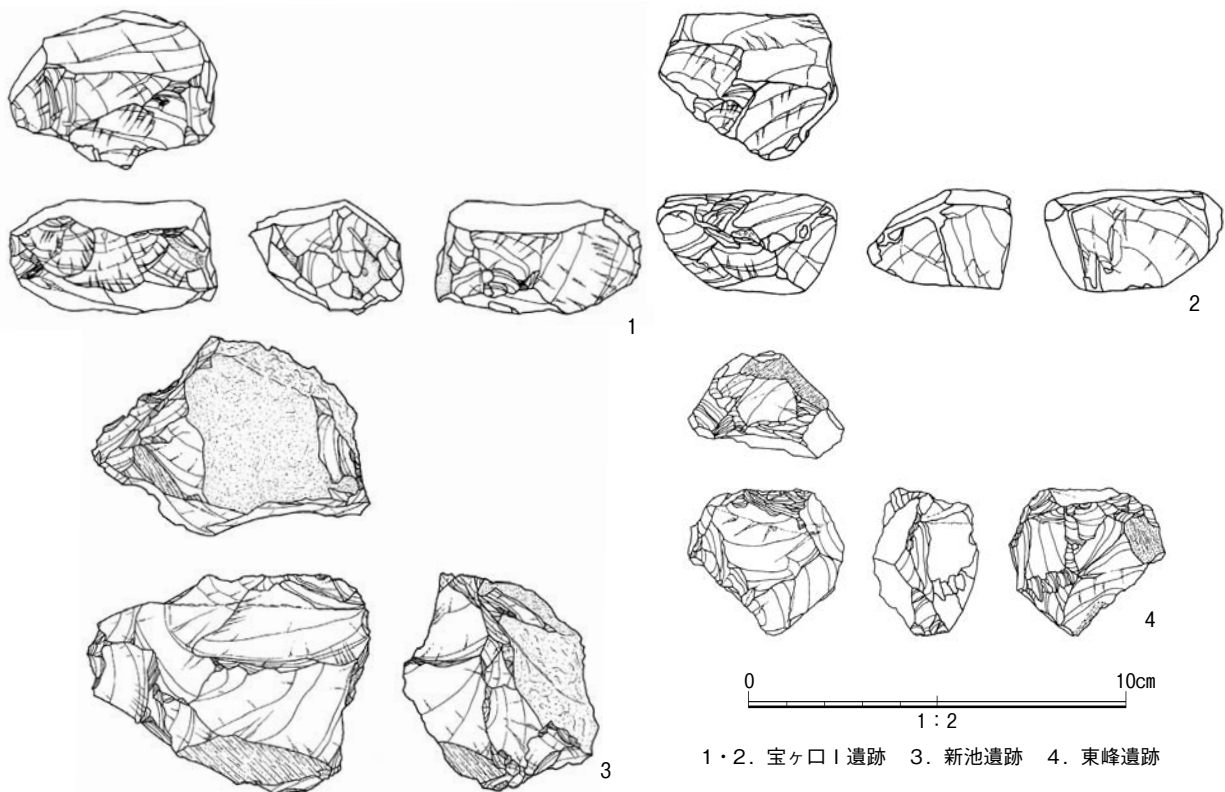
第6図 備讃瀬戸における流紋岩製石器の類例（秋山ほか1984、西村ほか1989）

方遺跡では不定形剥片素材の部分加工や一側縁加工、縦長剥片素材の二側縁加工があり、花見山遺跡では縦長剥片素材の一側縁加工がある。これら3遺跡から判断すれば、縦長剥片または不定形剥片を素材としたナイフ形石器との結びつきが強いといえよう。

さらに周辺地域の類例を考えてみると、まずは愛媛県宝ヶ口I遺跡を挙げるができる(塩見・丹下1994)。ここでは接合資料などの状況から2つの剥片剥離技術系統を見出している。詳細は割愛するが、宝ヶ口I遺跡の石器群には剥片素材で一方向または交互剥離による剥片剥離を行う剥片剥離技術Iと、分割礫を素材として一方向または打面転位をくり返して剥片剥離を行う剥片剥離技術IIが存在しており、このうち西方遺跡A地区の接合資料に比定できるものは剥片剥離技術IIであろう。さらに西瀬戸の愛媛県東峰遺跡の第III類石核(沖野・重松・多田1994)、同県新池遺跡の不定形剥片石核(作田・多田・成田2000)なども比定可能な石核であろう。これら比定された石器群については、交互剥離による剥片剥離技術や角錐状石器が伴い、備讃瀬戸における流紋岩製石器群の状況とは異なるようであるが、本稿ではナイフ形石器文化後半期で、始良Tn火山灰降灰後の所産であると想定しておきたい。

#### 4 石材について

ここで備讃瀬戸における流紋岩の石材別点数比を確認してみると、西方遺跡A地区ではナイフ形石器が0.1% (3,494点中6点)、大浦遺跡ではナイフ形石器が0.7% (126点中1点)、縦長剥片



第7図 西瀬戸の不定形剥片石核(沖野ほか1994、作田ほか2000、塩見ほか1994)

が1.1% (904点中10点)<sup>2)</sup>、花見山遺跡ではナイフ形石器が0.2% (454点中1点)、横長剥片石核が0.6% (159点中1点)、縦長剥片が0.1% (1,212点中1点)、縦長剥片石核が0.8% (120点中1点)、細石刃が0.2% (524点中1点)、細石核が0.4% (277点中1点) となり、いずれも1%前後の低い点数比となっている。

このような石材利用は、原産地と遺跡の距離にも反映されたものか、あるいは流紋岩そのものに対する依存度にも関係したことであろう。何れにしろ、こうした状況は備讃瀬戸での出土頻度が低いと判断できるものである。そして、今後生じる問題点があるとするならば、こうした石材の原産地と周辺遺跡での使用状況を把握することであろう。

## 5 おわりに

本稿では西方遺跡A地区で確認された接合資料について、その観察記載を中心にして様相の把握に努めてみた。さらに備讃瀬戸地域における流紋岩製石器の類例と比較し、ナイフ形石器文化後半期の石器群である可能性を示すことができた。また、石材の原産地解明などの新しい課題も増えた。今後の当地における調査研究に期待したい。

なお、本稿の執筆にあたり、遺物見学では以下の方々にご協力いただいたばかりでなく、多くのご教示を賜った。また、このたびの報告にあたっては、香川県埋蔵文化財調査センターのご理解とご協力があった。以下に記して感謝申し上げたい。

氏家敏之 小野秀幸 西村尋文 原 芳伸 藤好史郎 古野徳久 森下英治 渡部明夫  
香川県埋蔵文化財調査センター

(2006年3月31日)

## 註

- 1) これらの個体は、石材の風化面の色調や不純物の混入状態などから識別した。なお、接合したもの以外の石器類を個体別分類した場合、大山・藤好1985の第71図705・708、同第229図1・7、同8・10、同9、同13の5個体に分けられ、全体で6個体であることが確認できた。
- 2) 大浦遺跡の報告書で図示された第150図34～第151図6の10点の剥片は、縦長剥片として分類されているが、実測図で確認する限り複数の不定形剥片が含まれるようである。

## 参考文献

- 秋山 忠・真鍋昌宏・渡部昭夫1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 羽佐島遺跡(Ⅰ)』香川県教育委員会。
- 秋山 忠・藤好史郎・真鍋昌宏1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大浦遺跡』香川県教育委員会。
- 大山真充・藤好史郎1985『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 西方遺跡』香川県教育委員会
- 沖野新一・重松佳久・多田 仁1994「愛媛県東峰遺跡の採集遺物」『旧石器考古学』48、旧石器文化談話会
- 作田一耕・多田 仁・成田 淳2000『新池遺跡 市場南組窯跡 四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書

XIV』愛媛県埋蔵文化財調査センター

塩見靖彦・丹下厚法1994「第4章宝ヶ口I遺跡」『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』愛媛県埋蔵文化財調査センター

西村尋文・藤好史郎1989『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 花見山遺跡』香川県教育委員会

廣瀬常雄1983『日本の古代遺跡8 香川』保育社

森下英治1997「三条黒島遺跡 川西北七条I遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第27冊』香川県埋蔵文化財調査センター

森下英治2001『中間西井坪遺跡Ⅲ 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第37冊』香川県埋蔵文化財調査センター

# 愛媛県の盾形埴輪

—小竹8号墳・樹之本古墳出土の資料について—

大野由美子

## 1 はじめに

盾形埴輪はしばしば他の器財埴輪・円筒埴輪とともに墳丘上に樹立される。円筒埴輪が川西宏幸氏によって編年が提示され(川西1978)、現在では地域ごとの編年作業とともに地域性の抽出作業が進められるのに対し、盾形埴輪を含めた形象埴輪の編年、地域性研究は近年始まったばかりといえる。愛媛県内においては、1984年の遺跡発行会による集成作業(遺跡発行会1984)以降も発掘調査により新たに資料が増加しつつあるが、形象埴輪についての体系的な検討は十分になされていない。

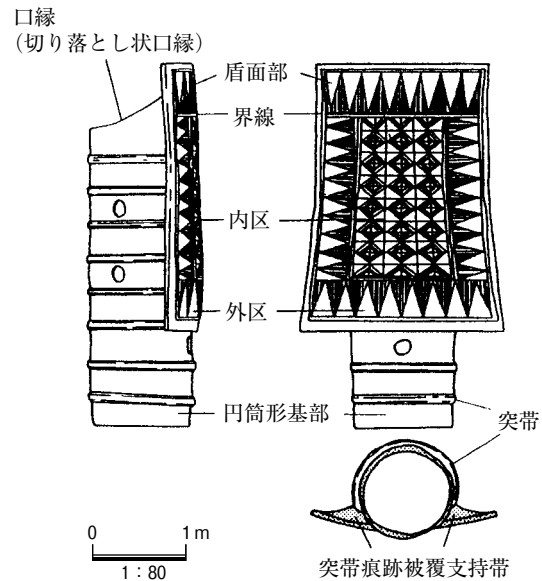
今回、松山市小竹8号墳(旧北条市)で表採された盾形埴輪と、今治市樹之本古墳(旧越智郡朝倉村)出土の盾形埴輪を紹介し、愛媛県における埴輪の様相を探る手がかりとしたい。

なお、盾形埴輪の部分名称については和田剛氏が整理しており(和田2000)、概ね賛同できるため、本論ではそれを引用することとする(第1図)。

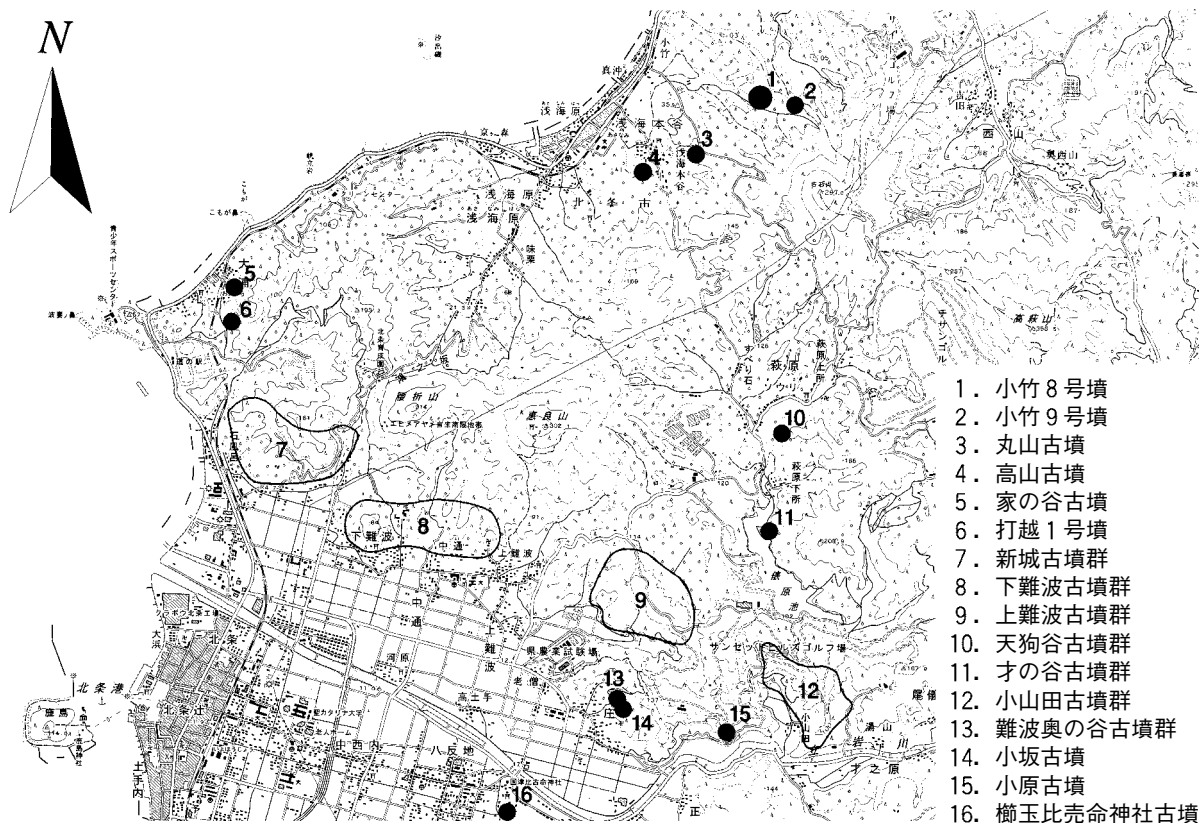
## 2 小竹8号墳

小竹8号墳は松山市北条大字浅海本谷字名石に所在し、名石古墳とも呼ばれる(第2図)。北条平野の北側山塊を越えた海へ延びる支丘の先端部に位置し、直径約30m程の円墳の下周に円筒埴輪を廻らせてある。開壘の際、墳頂下に3つの箱形石棺が並んでおり、東側の石棺には2体の人骨があった。また、石棺外に直刀、鉄剣、鉄鎌、鉄斧が副葬されていたということである(相田1980)。

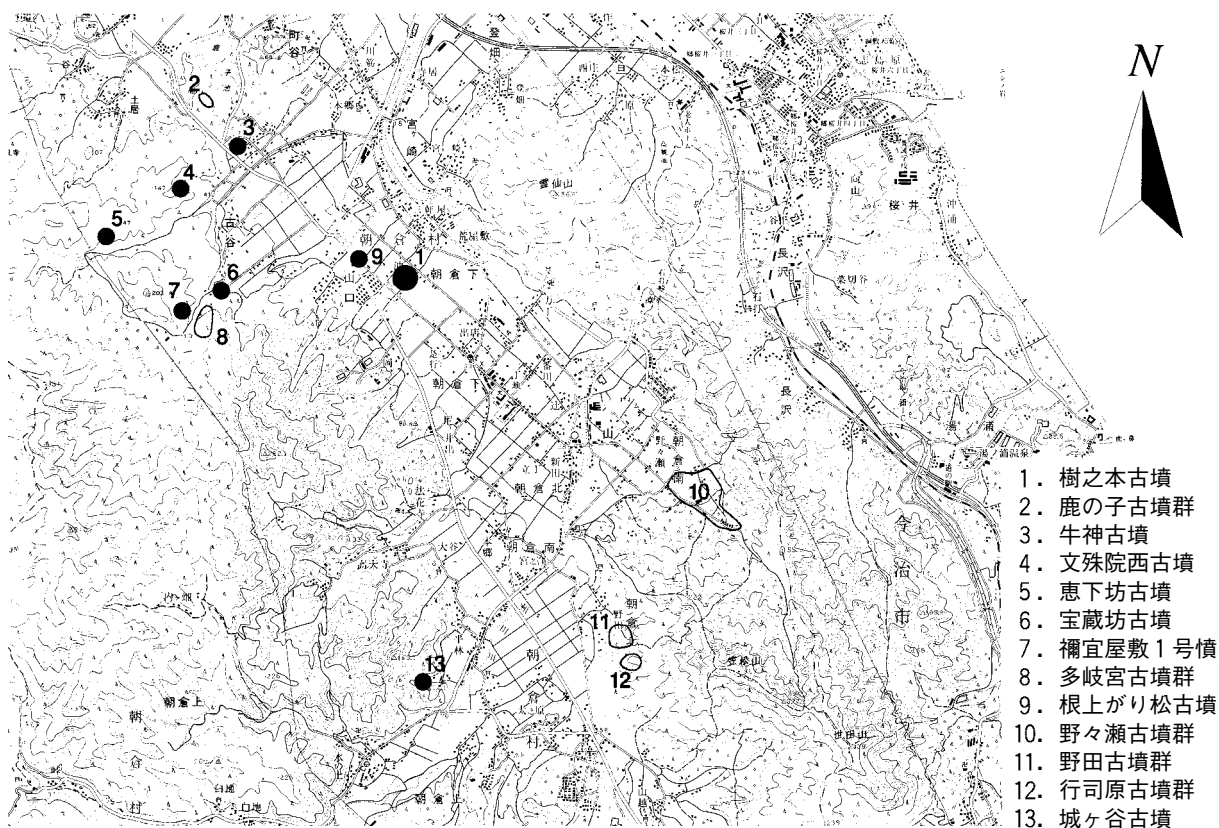
北条ふるさと館には、この古墳から故得居義治氏が採集されたとされる盾形埴輪片が所蔵されている。以下、この盾形埴輪の特徴を述べる。



第1図 盾形埴輪の部分名称(和田2000)



第2図 小竹8号墳周辺の主要古墳 (S = 1 / 50,000)



第3図 樹之本古墳周辺の主要古墳 (S = 1 / 50,000)



### (1)出土資料の観察 (第4図)

1は、盾形埴輪の盾面部側辺である。盾面部の文様は梯子文により内区・外区を区画され、外区には8～10本一組の鋸歯文、内区には5重の菱形文が描かれている。この鋸歯文・菱形文が先の細い工具により施文されているのに対し、梯子文は貝殻の押圧によって施文されている。盾面部表面は丁寧なナデ調整を行っているが、一部にハケ目も見られる。また、赤色顔料の塗布も認められる。黒斑は見られない。

裏面及び破断面の観察により、円筒形基部と盾面部の接合方法が復元できる。基部との接合部に粘土を充填し盾面部を固定した後、基部の突帯部分にはさらに粘土を貼りつけ、盾面部側縁までを支える板状の粘土帯を作る。この方法は和田剛氏が指摘する突帯痕跡被覆支持帯である(和田2001)。

### (2)円筒埴輪による年代 (第5図)

盾形埴輪の編年作業については文様構成や製作方法の変化により編年を組む研究もなされているが、「地域差や製作者の個性が反映されやすく、編年の指標となりにくい」という高橋克壽氏の指摘もある(高橋1988)。また、後述する樹之本古墳の資料は製作方法が推定できないため、両者を比較することが難しい。よって、今回は伴出している円筒埴輪の年代を援用し、盾形埴輪の時期としたい。

2～4は全て胴部の破片である。2・3は外面に2次調整ヨコハケが見られるが、4のように1次調整のみの個体もある。ヨコハケに関しては、静止痕は見られない。内面にはどの個体もヨコハケを施している。また、黒斑は見られない。以上の特徴より、これらの資料は5世紀後半のものと考えられる。

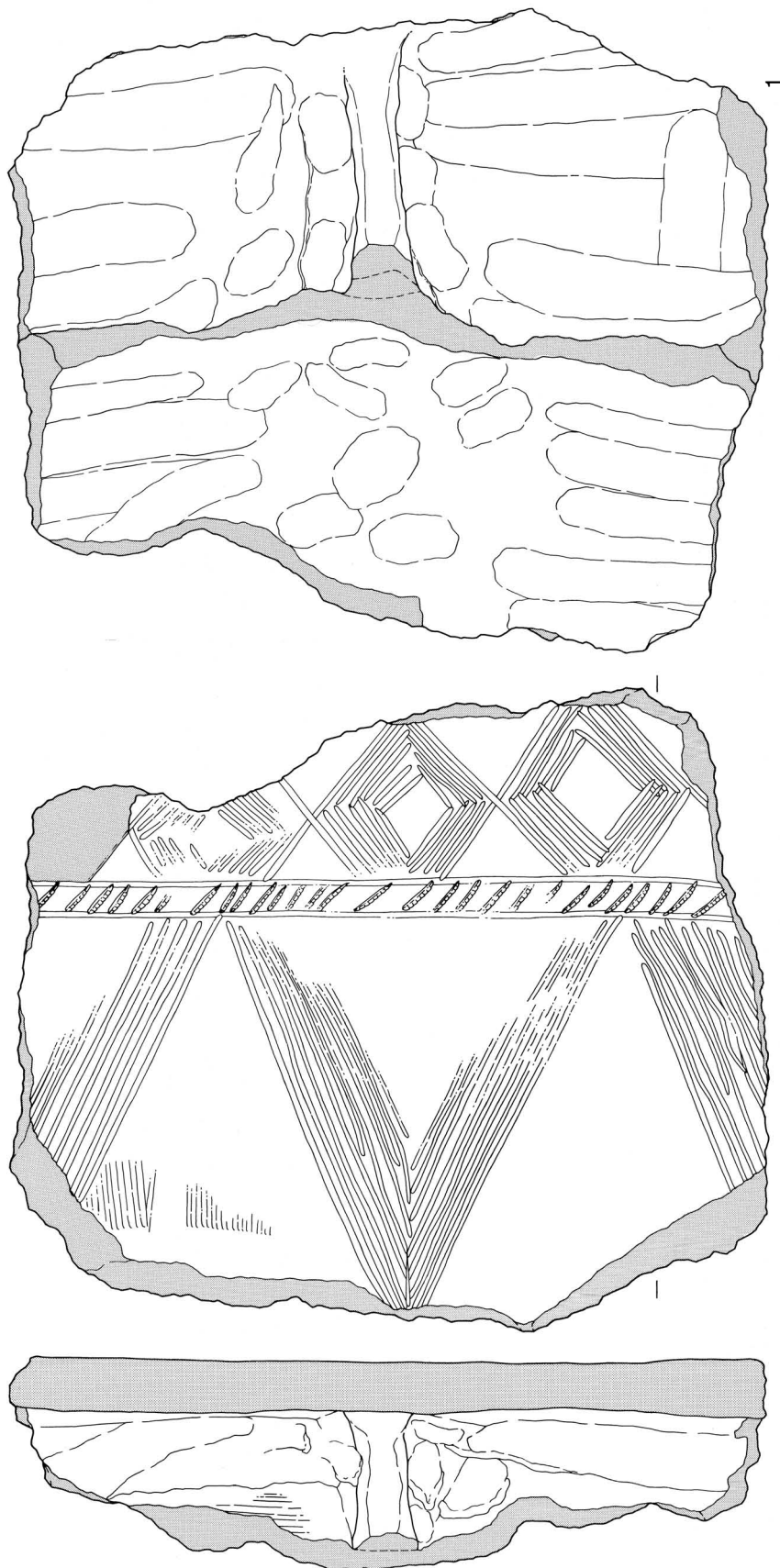
## 3 樹之本古墳

樹之本古墳は今治市朝倉村丈六寺に所在する(第3図)。今治平野の南部を流れる頓田川上流の台地上に単独立地する直径40×30mの円墳で、周溝を伴う。1908年の地元の方による発掘調査により鉄製品が、また、1989年の墳丘周辺の発掘調査の際には円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪(蓋・甲冑・人物・馬)が出土している。また、1988年の愛媛県埋蔵文化財調査センターによる確認調査の際には陶質土器が出土している(県埋文センター1989)。なお、主体部からの出土品として細線式獣帯鏡、硬玉製勾玉、碧玉製管玉、砥石があり、これらは東京国立博物館に収蔵されている。

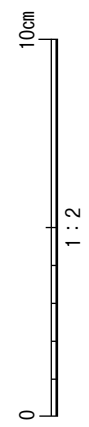
### (1)出土資料の観察 (第6図)

今回図化したものは1989年の調査の際周溝より出土した盾形埴輪片2点である。

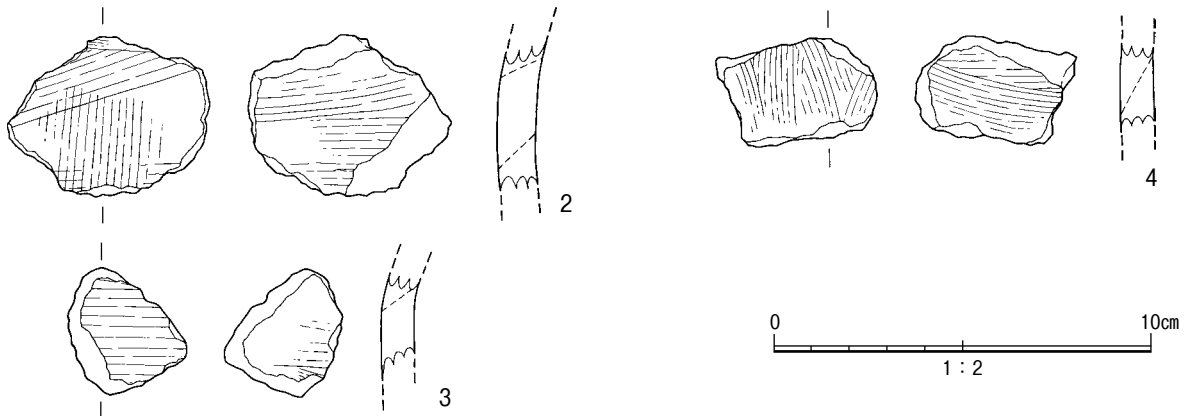
5は盾面部の側縁部である。外縁に綾杉文を描いた内側に、斜めに延びる平行線を描いている。この平行線はおそらくは小竹8号墳のものと同様に鋸歯文であると思われる。また、6も盾面部の破片と思われる。3条の平行線が書かれており、5と同様の鋸歯文、あるいは外縁を囲う平行線の可能性もある。平行線であるとするれば、樹之本古墳では文様の異なる盾形埴輪を2個体以上使用していた可能性も考えられる。



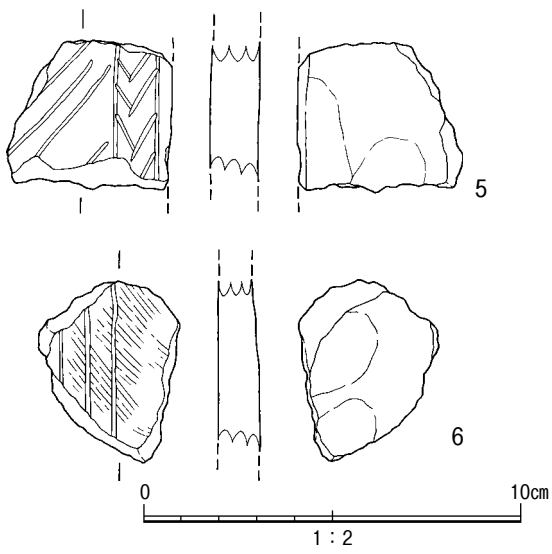
※1のみ、スクリーントーン内は破面を表す



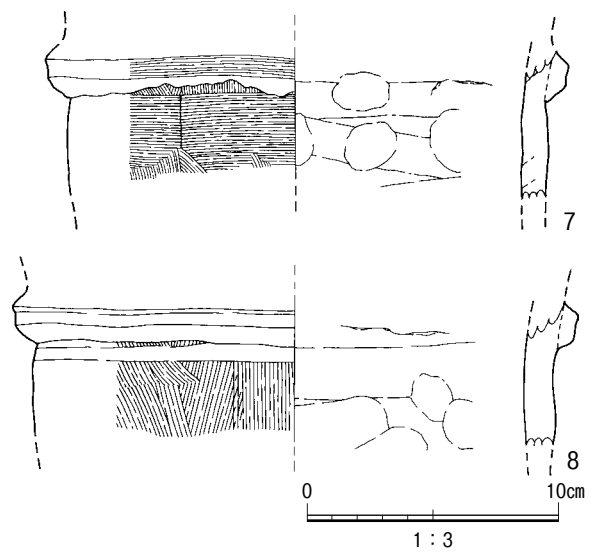
第4図 小竹8号墳採集の盾形埴輪



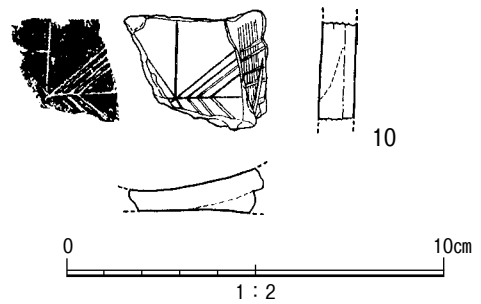
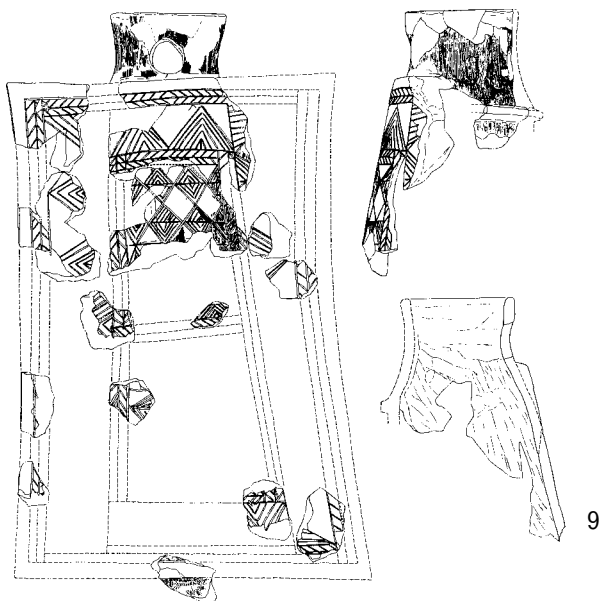
第5図 小竹8号墳採集の盾形埴輪



第6図 樹之本古墳出土の盾形埴輪



第7図 樹之本古墳出土の盾形埴輪



9 大阪府高廻り2号墳（永島1991より引用）  
10 大分県大在古墳（宮内・田中1995より引用）

第8図 盾形埴輪の諸例

## (2)円筒埴輪による年代（第7図）

7, 8は胴部の破片である。7は外面に静止痕の見られるヨコハケ、内面はナデを施している。突帯は台形を呈する。8は外面に1次調整タテハケのみ、内面はナデを施している。突帯は台形を呈する。ともに黒斑は見られない。以上の特徴から、これらの資料は5世紀後半のものであると考えられる。

## 4 愛媛県における中期の盾形埴輪

以上、円筒埴輪の年代を援用してこれらの盾形埴輪の時期を推定すると、小竹8号墳、樹之本古墳の時期はほぼ同じ5世紀後半代と推定できる。

これら3点の資料は、その文様、製作方法ともに、盾形埴輪において一般的に見られる形態である。しかし、細部に注目すると、樹乃本古墳の盾形埴輪の文様は全て一本一本工具で描かれているのに対し、小竹8号墳の盾形埴輪は梯子文のみ貝殻の押圧によって描かれているという、施文方法については相違点が見られる。また、菱形文についても、外側の菱形を先に斜格子状に描くことによって割り付けを行い、その中に何重にも菱形文を充填している。このような方法は大阪府高廻り2号墳（永島1991）でも確認されているが、この資料は川西編年Ⅱ期（川西1978）とやや時期差がある。なお、古墳時代中～後期における菱形文の割り付け方法は、大分県大在古墳出土の例（宮内・田中1995）に見られるように、内区を格子状に割り付けした後、菱形文の頂点を格子に沿わせて描く方法が圧倒的に主流である（第8図）。このことから、製作法においては周辺地域と共通した方法をとつつも、施文方法については独自性も伺える資料であるといえる。

また、両古墳の資料を比較した際、胎土の違いも挙げられる。小竹8号墳の資料が黄褐色を呈し比較的荒い胎土であるのに比べ、樹之本古墳の資料は灰白色を呈する精緻な胎土である。施文方法が異なっていること、さらに樹之本古墳の円筒埴輪には須恵質のものも含まれることも合わせると、これらの製作に関係性は見出がたい。現在県内で確認されている盾形埴輪を持つ古墳は、可能性のあるものを含め12例と、円筒埴輪の例に比べ格段に少ない。砥部町谷田1号窯・2号窯（阪本1981）のみしか埴輪窯が確認されていない現在、これらの埴輪製作がどのような形で行われていたかが伊予の埴輪研究における課題といえる。今回の資料観察からは、盾形埴輪においては時期を同じくするものでも、文様の全体形としての共通点はあるものの細部の製作方法には相違点が見受けられ、周辺地域と連動した製作をしつつも近距離間で影響し合うことはないといえるのではないだろうか。

## 5 おわりに

以上、小竹8号墳と樹之本古墳出土の盾形埴輪について紹介し、それらの比較検討を行った。古墳に樹立する埴輪は、本来円筒埴輪や種々の形象埴輪とセットで埴輪群として捉えられるものであり、盾形埴輪1つをとって埴輪生産の様相を述べることは困難であるかもしれないが、盾形埴輪で見られた様相が他の埴輪にも共通する可能性もある。今後は他の埴輪も含めた更なる資料の蓄積と総合的な検討が必要であることを痛感する。

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたり、当センターの多田仁氏、山内英樹氏には執筆の機会の提供とご指導を賜りました。また、資料の実見の際には窪田利子氏、長井つやこ氏、長尾齊氏、渡邊暁英氏、松山市北条ふるさと館・朝倉ふるさと古墳美術館の皆様には便宜を図っていただきました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

(2006年2月27日)

## 参考文献

- 相田則美1980「4・5世紀伊予の首長墓」『「社会科」学研究』1
- 朝倉村教育委員会編1990『古代のあさくら』
- 遺跡発行会1984『遺跡 特集・愛媛の埴輪研究』第26号
- 一瀬和雄1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修にともなう発掘調査概報』V、大阪府教育委員会
- 井出耕二1983「越智郡朝倉村樹の本古墳出土の蓋形埴輪」『遺跡』第24号、遺跡発掘会
- 愛媛県教育委員会2000『愛媛県埋蔵文化財包含地一覧表』
- 小栗明彦1994「山陵町遺跡 SD-02及びSD101出土の埴輪について」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第67冊 平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪』奈良県立橿原考古学研究所
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、考古学会
- 楠本哲夫1985「大和における盾形埴輪の系譜」『平等坊・岩室池遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 阪本安光1981『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ、愛媛県教育委員会
- 高橋克壽1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71-2、史学研究会
- 高橋工1991「盾型埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』大阪市文化財協会
- 田中秀和1994「畿内における盾形埴輪の検討—革製模倣盾型埴輪を中心として」『大阪市文化財論集』大阪市文化財協会
- 永島暉臣1991『大阪府平野区长原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ前編』大阪市文化財協会
- 正岡睦夫2002「北条市浅海の古墳」『遺跡』第39号、遺跡発行会
- 宮内克己・田中裕介1995『大在古墳・浜遺跡第2地点』大分県教育委員会
- 森毅1980「越智の前半期の古墳と樹之本古墳」『遺跡』第18号、遺跡発行会
- 山内英樹2001「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(2)—特徴的な形態・技法を有する埴輪について—」『紀要愛媛』2、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 和田剛2000「形象埴輪から見た造山2号墳」『造山2号墳』岡山県教育委員会



# 愛媛県出土埴輪の基礎的研究（6）

—今治平野の埴輪資料について—

山内 英樹

## 1 はじめに

これまでの「基礎的研究」では、松山平野および北条（風早）平野の円筒埴輪を中心に資料蓄積および新視点を持ちながら検討を進めてきた。特に古墳時代中期末から後期後葉にかけての変遷については、幾つかの画期を見出すことが可能であるという見通しを持つに至った。

しかし、未報告資料や情報不足の埴輪資料は県内全域で認められ、地域間での比較検討を行うには未だ至っていないのが現状である。特に、東予地域の資料不足は否めず、埴輪資料の極めて少ない地域として理解されている。実際には古墳時代前期から後期に至る全時期に埴輪の樹立がなされており、松山（風早）平野との比較検討が十分に可能であるばかりでなく、松山平野では空白となる時期の資料が窺える良好なフィールドである。

そこで本稿では今治平野を対象として、円筒埴輪の様相を少し触れたいと思う。まず過去に発掘調査が実施された、今治市治平谷11号墳出土の埴輪資料について再検討を試み、その成果を踏まえ、特に近年、発掘調査が進み資料数が増加している今治平野北部の後期古墳の出土埴輪と比較しながら、その形態的・技法的特徴を抽出する。さらに、松山（風早）平野の同時期の資料との関連性についても、概略ではあるが述べることにしたい。

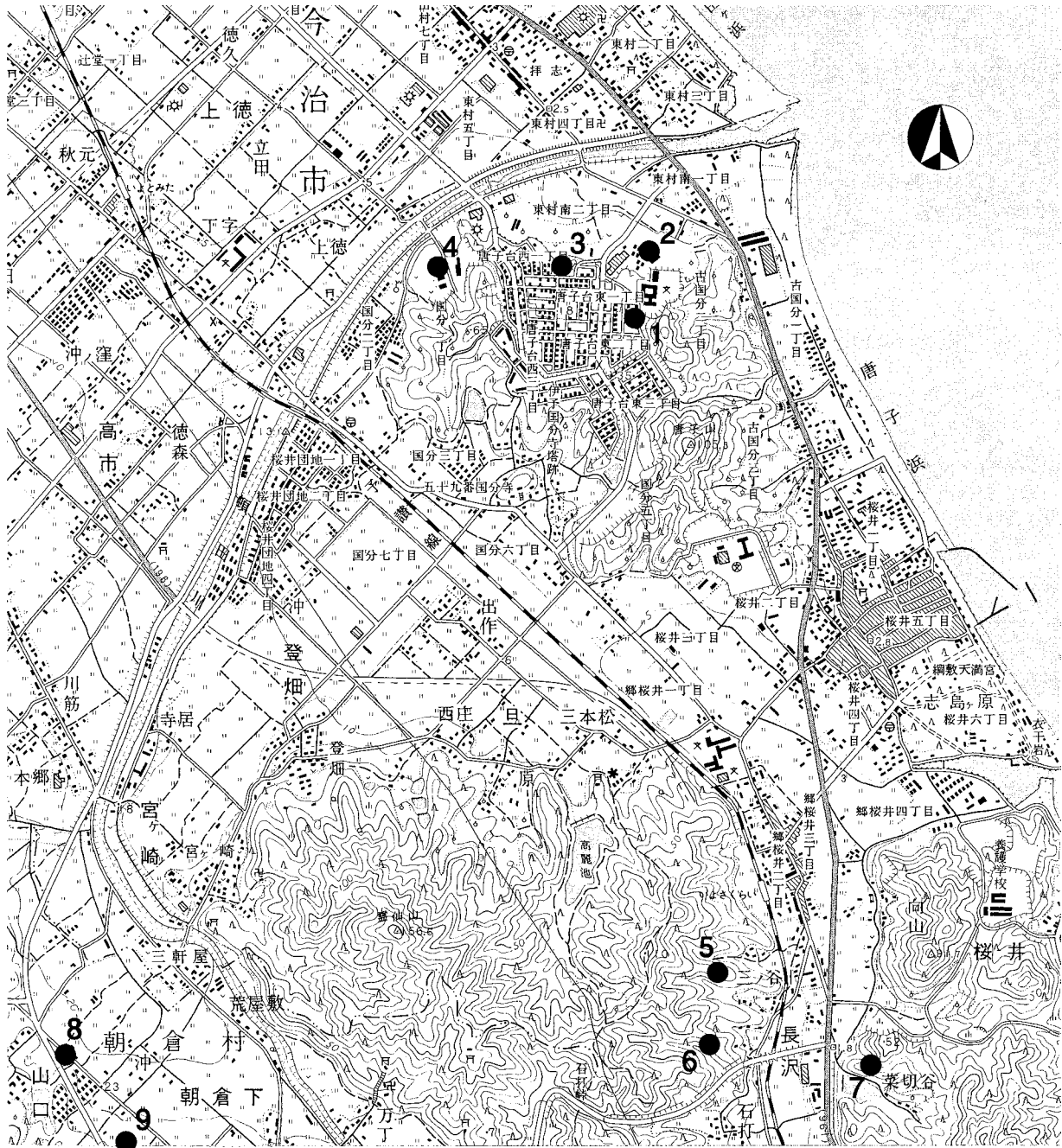
## 2 治平谷11号墳の埴輪について

### (1)立地と出土契機

治平谷11号墳は、今治平野南東部、頓田川を北に望む独立丘陵上に展開する、弥生時代後期から古墳時代全般にかけての墳墓群として有名な「唐子台遺跡群」中に立地する。本古墳は昭和52（1977）年から53年にかけて発掘調査が実施され、報告書が刊行されている（今治市教育委員会1979）。墳丘は開墾など後世の削平により現状が改変されていたが、トレンチ調査の結果、墳長約9mと判断された。墳形は裾部に樹立された埴輪列から判断して、円墳の可能性が高い。

埋葬主体は横穴式石室2基で、出土遺物は盗掘を受けており、鉄鏝が僅かに出土したのみであった。所属時期は古墳時代後期と考えられ、周辺の横穴式石室と時間差は少ないものと思われる。

今回報告を行う資料は、一次調査および二次調査で出土した円筒埴輪片である。基底部は残存しており、調査の際に番号を付して取り上げているものの、注記は殆ど無く、写真および実測図を手掛かりに可能な限り対応させて再実測作業を進めた。資料は現在、今治市教育委員会が保管している。以下にその観察を記すことにする。



- |            |            |               |
|------------|------------|---------------|
| 1. 治平谷11号墳 | 2. 雉之尾1号墳  | 3. お茶屋池前前方後円墳 |
| 4. 国分古墳    | 5. 二の谷2号古墳 | 6. 長沢1号古墳     |
| 7. 菜切谷4号墳  | 8. 根上がり松古墳 | 9. 樹之本古墳      |

第1図 今治平野南東部の主要古墳



## (2)資料の観察

治平谷11号墳の発掘調査では、計7本（一次調査3本・二次調査4本）の円筒埴輪が原位置で出土している。残存部分は基底部が中心で口縁部片は殆ど確認されていない。今回実測を行った資料5点は、口縁部片および基底部から1・2段目までの突帯が部分的に観察可能である。

1は円筒埴輪の口縁部である。復元口径25.0cmを測り、口縁端部にかけて内傾し、端部で上方にのびる。外面調整は8本/cmの工具原体を用いたナナメハケが施されている。端部には強い横ナデによる窪みが認められる。内面は指による強いナナメナデが明瞭で、端部は幅1.5cmの横ナデによりナナメナデが消されている。端部上面も指ナデが顕著で、窪みが認められる。色調は明褐色で赤みが強く、焼成も堅緻である。焼き歪みの可能性も僅かに残る。

2は基底部から2段目突帯までが残存する個体であり、報告書2次調査・No2に対応する。残存高28.8cmを測り、上方に向かって開く形状を呈する。突帯は断続ナデにより器面に貼り付けられた後、強めの横ナデを施しており、断面形は低い「M」字を呈する。突帯下部に断続ナデの痕跡が残る。突帯間の距離は9.2cmとやや狭い。外面には6～7本/cmのナナメハケが認められ、内面はナナメナデおよび突帯貼り付け時の指オサエ列が残る。突帯間に円形のスカシ孔を穿つ。

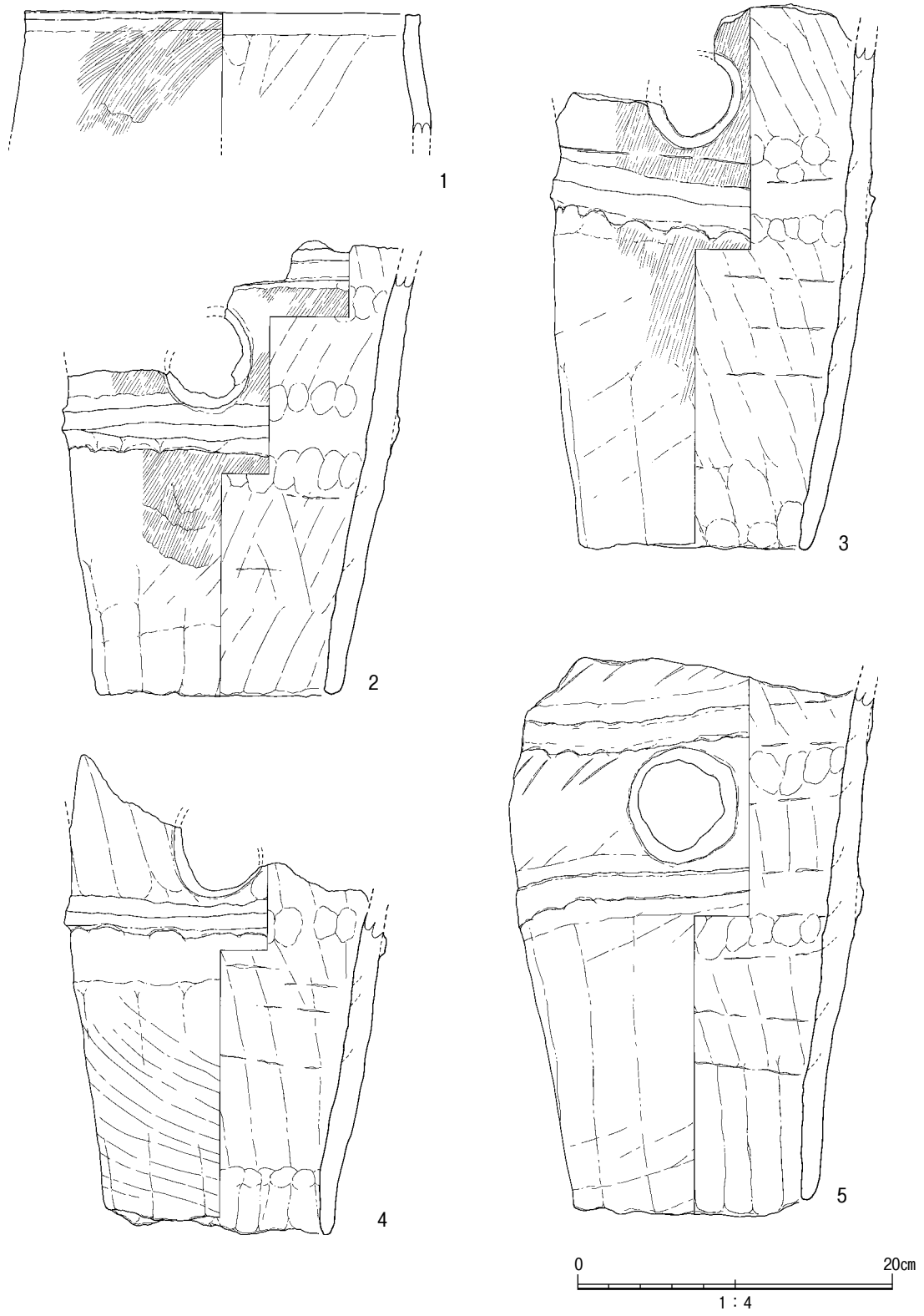
基底部は底径14.7cm、基底部高16.7～17.2cmを測る。外面はタテ方向に約3cm幅のオサエが認められ、基底端部より5cmの地点で屈曲する。ナナメ方向の板ナデらしき痕跡も認められる。恐らく全体にオサエを施した後、端部付近に再び基底部調整を行った可能性が高い。内面には指ナデもしくはオサエが列状に並び、端部から5cmの地点でオサエの方向が変わる。端部は尖り気味で底面は波打つ。色調は明黄褐色を呈し、焼成も良好である。

3は基底部から2段目突帯付近までが残存する個体であり、報告書1次調査・No1に対応する。残存高34.5cmを測り、上方に開きが弱く、基底部が内湾気味にのびる。突帯は2と同じく断続ナデにより器面に貼り付けている。断面形は低い「M」字を呈する。突帯上部には突帯に並行して横方向の擦痕が認められ、下部に断続ナデの痕跡が残る。外面には5本/cmのナナメハケが認められ、内面はナナメナデおよび突帯貼り付け時の指オサエ列が残る。粘土紐の接合痕が明瞭に残り、1段目突帯上に円形のスカシ孔を穿つ。

基底部は底径14.3cm、基底部高20.0～22.3cmを測る。外面はタテ方向に4～5cmの幅広オサエが認められ、基底端部より4～5cmの地点で屈曲する。ナナメ方向の板ナデ調整は2より顕著である。内面には指ナデもしくはオサエが列状に並び、端部付近には強い指オサエが残る。端部は尖り気味で底面は波打つ。色調は白みを帯びた明黄褐色を呈し、焼成は良好である。

4は基底部から2段目突帯下までが残存する個体であり、報告書1次調査・No3に対応する。残存高30.3cmを測り、上方に向かって開く形状を呈する。突帯は2と同じく断続ナデにより器面に貼り付けている。断面形は磨耗により低い台形を呈し、下部に断続ナデの痕跡が残る。外面にはハケが認められず、内外面はナナメナデにより器面調整がなされる。粘土紐の接合痕が明瞭に残り、1段目突帯上に円形のスカシ孔を穿つ。

基底部は底径13.8cm、基底部高18.6～19.0cmを測る。外面はタテ方向に3～4cmのオサエが認められ、基底端部より5cmの地点で屈曲する。ナナメ方向（右下がり）の板ナデ調整は顕著で多



第2図 治平谷11号古墳・埴輪

条認められる。内面には指ナデもしくはオサエが列状に並ぶ。端部は尖り気味で、底面は大きく波打つ。色調は赤みを帯びた明褐色を呈し、焼成は普通である。

5は基底部から2段目突帯までが残存する個体であり、報告書2次調査・No3に対応する。残存高35.4cmを測り、上方に向かって開く形状を呈する。突帯は断続ナデにより器面に貼り付けられた後、強めの横ナデを施しており、低平である。突帯下部に断続ナデの痕跡が残る。突帯間の距離は10.0～11.2cmとやや狭い。外面にはハケが認められず、内外面はナナメナデにより器面調整がなされる。粘土紐の接合痕が明瞭に残り、突帯間に円形のスカシ孔を穿つ。

基底部は底径14.7cm、基底部高18.2～20.0cmを測る。外面はタテ方向に3～4cm幅のオサエが認められ、基底端部より7cm付近の地点で僅かに屈曲する。ナナメ方向の板ナデ痕も認められる。内面の指オサエ痕はそのピッチが長い。端部は尖り気味で、底面は大きく波打つ。色調は明黄褐色を呈し、焼成は普通で器面がやや脆い。

### (3)資料の評価

以上の観察より抽出された本古墳出土の埴輪の諸特徴をあげると次のようになる。

- ①器面調整は外面ナナメハケを施す個体と、ナデのみで調整する個体とが認められる。内面はナナメナデが主体で、ハケ原体は5～8本/cmと幅が見られる。
- ②口縁部は内傾するものが認められる。
- ③突帯は断続的な指ナデによる貼り付け後、横ナデ調整により突帯表面の凹凸を丁寧に消している。断面は低い「M」字形または殆ど高まりを持たない形状である。
- ④基底部調整は倒立により板オサエまたは指オサエ調整を施す。

このうち②については個体数が1点のみということもあり、本古墳出土埴輪の特徴すべてを示しているとは言い難いが、①および③は磨耗による調整の不明瞭が見られるものの、傾向性が窺える。つまり、①についてはハケ原体の差異、③については、「断続ナデ技法」として認識(川西1978)されていた突帯貼り付け手法がすべての段に認められる。

④の基底部調整については、すべての個体に「基底部倒立調整」(山内2003a・2003b)が認められる。その手法は、幅3～5cmの板オサエを最下段突帯付近まで施した後、基底端部より5cm程の高さまで、更に強い二段階のオサエが認められる。内外面の傾斜が変化することから判断可能である。その後、オサエで歪んだ外面をナナメ方向の板ナデにより丸く整えている。ただし、実測図4のように板ナデ痕が多条残る個体や、あまり目立たない個体まで様々である。また、内面の粘土紐接合痕が比較的確認しやすく、基底端部より10cm前後で粘土輪積みを作成した後、幅3～4cmの粘土紐を巻き上げていることが明らかである。

これらの検討より、本古墳出土の埴輪の年代的な位置付けを試みると、明確な基底部倒立調整や突帯貼付の簡略化、基底部の伸長化などからみて、概ね6世紀中葉～後葉の年代観が想定できる。この年代観は、治平谷古墳群の築造年代と大きな年代格差は見られない。しかし、この点についても県内全般の様相から判断したもので、平野内でのより詳細な検討は必要である。

### 3 今治平野での比較検討

今治平野内においては、後期古墳から円筒埴輪の出土はあまり知られていなかったが、近年の発掘調査で前方後円墳からの出土が報告されている。そこで本章では、両古墳の埴輪について説明を加えた上で、治平谷11号墳との比較検討を行うこととする。

#### (1)高橋仏師1号墳

高橋仏師1号墳は今治市高橋に所在し、墳長約21mを測る前方後円墳である。愛媛県埋蔵文化財調査センターにより発掘調査が実施され、くびれ部を中心に円筒埴輪・鶏形埴輪・人物埴輪などの資料が確認された（愛媛県埋蔵文化財調査センター2005・山内2005a）。古墳築造年代は6世紀中葉と考えられる。

本古墳出土の資料（第3図1）は、器高56.0cm、口径28.6cm、底径13.6cmを測る。口縁部は外反しながら開き、端部はナデにより窪みを有する。突帯は3条みられ、断続ナデにより貼り付けている。その後横ナデにより調整され、断面形は低平な三角形状を呈する。突帯下部にその痕跡が残る。スカシ孔は基底部と口縁部を除く各段に、対置して2個ずつ確認できる。外面調整は7～8本/cmのナナメハケを施すが、口縁部はナナメナデでハケが見られない。

基底部高は20.5cmと非常に長く、外面調整も板状工具によるオサエ（もしくはタタキ）の痕跡が顕著である。オサエの後、端部付近を中心にナナメ方向のオサエ（ナデ）が認められ、内面は対応するように幅広の指オサエが見られる。端部は波打っていることから、上下2段階の「基底部倒立調整」が行われたものと考えられる。端部は尖り気味である。

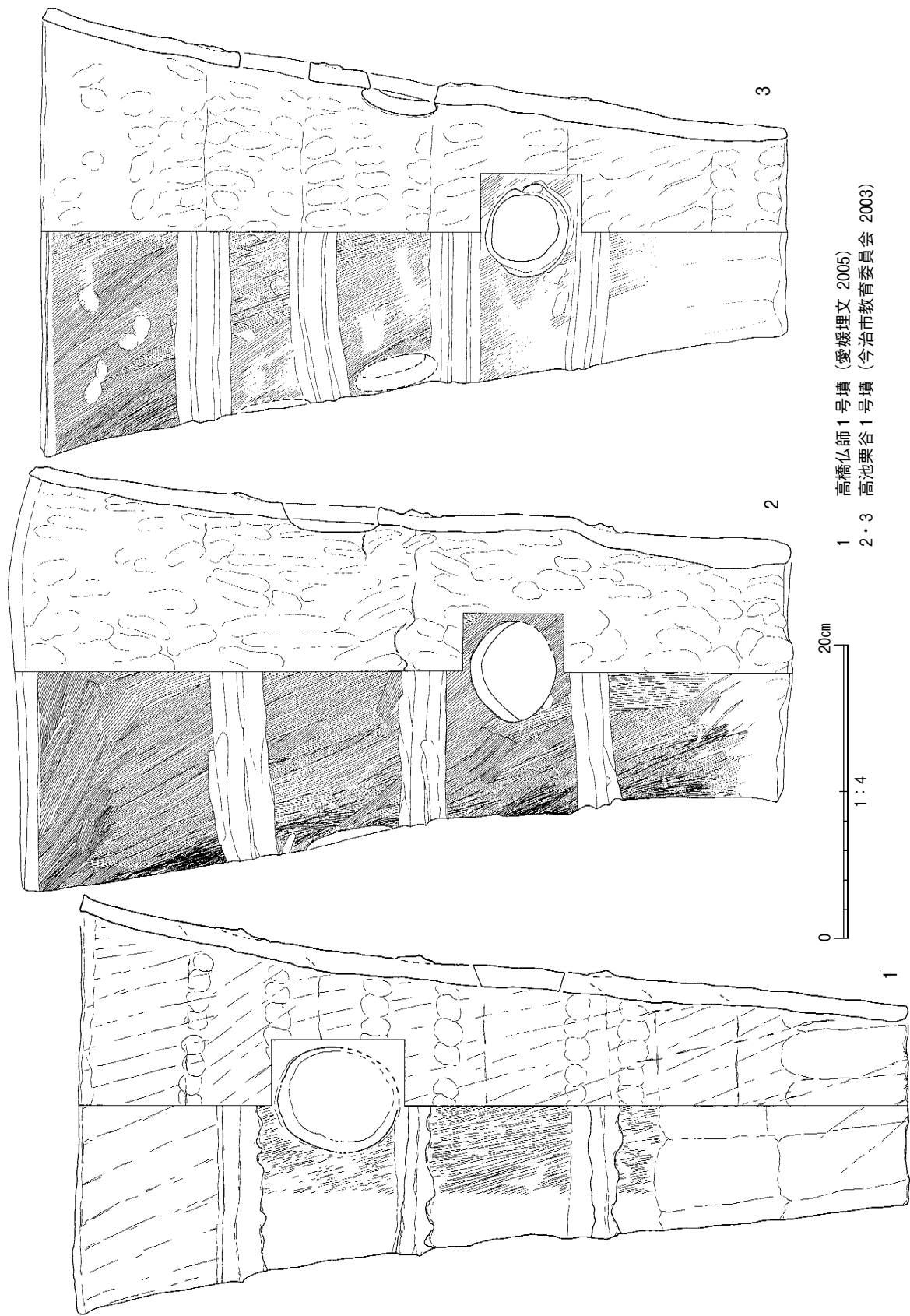
#### (2)高地栗谷1号墳

高地栗谷1号墳は今治市高地町に所在し、墳長約30mを測る前方後円墳である。今治市教育委員会により発掘調査が実施され、くびれ部北斜面を中心に円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪などの資料が確認された（今治市教育委員会2003）。古墳築造年代は6世紀後半と考えられる。

本古墳出土の資料（第3図2・3）は、いずれも全体が復元できる個体である。2は器高52.6cm、口径28.4cm、底径17.2cmを測る。口縁部はやや直線的に開き、端部内外面はナデにより窪む。突帯は3条みられ、断続ナデによる貼り付けが強い横ナデにより消されており、僅かに突帯上部でその痕跡が認められる。断面形は低い「M」字を呈する。スカシ孔は基底部と口縁部を除く各段に、対置して2個ずつ確認できる。外面調整は8本/cmと細かいナナメハケを施す。

基底部高は13.0cmと底径より短く、外面調整は端部より5～6cmと狭い範囲で板状工具のオサエが認められる。特にナナメ方向のオサエ痕は顕著である。おそらくナナメ方向のオサエの後、端部を縦方向に板オサエを施したものと考えられる。内面は対応するように指オサエの痕跡が強く残る。端部の波打ち方より判断して、「基底部倒立調整」と思われる。

3は器高50.5cm、口径31.4cm、底径13.6cmを測る。口縁部はやや外反しながら開き、端部はナデにより窪みを有する。突帯は4条みられ、断続ナデの貼り付け痕は横ナデにより調整され確認できない。断面形はかなり低平な「M」字を呈する。スカシ孔は基底部と口縁部を除く各段に、対置して2個ずつ確認できるが、1・2と異なり、上の2段のスカシ孔位置がほぼ水平である。外面調整は7～8本/cmのナナメハケを施す。



- 1 高橋仏師1号墳 (愛媛埋文 2005)
- 2・3 高池栗谷1号墳 (今治市教育委員会 2003)

第3図 今治平野の円筒植輪

基底部高は12.8cmで底径に近い。外面調整は板状工具によるオサエ痕が認められる。オサエの後、端部付近を中心にオサエを再び施し、内面は対応するように強い指オサエで器面が窪む。端部は若干波打っていることから、「基底部倒立調整」が行われたものと考えられる。

### (3)各埴輪の比較検討

先述した2古墳に加えて、今治平野の埴輪に関するこれまでの先学研究（正岡1984、森1983・1984）を参考にしながら若干まとめることにする。

今治平野の後期古墳として、円筒埴輪全体が復元できるものは、突帯3条4段構成または4条5段構成である。器面調整のハケ調整（7～8本/cm）やナデには共通性があり、個体での差異は明確ではない。スカシ孔は円形で各段に二つずつ穿たれている。突帯貼り付け手法の「断続ナデ」については、これまでは特殊な「技法」として認識され、川西氏の円筒埴輪編年V期前半を示す根拠となっていたが、これは最下段突帯の断続ナデがその後のナデにより消されていない場合に有効であって、後期古墳の円筒埴輪の大半は断続ナデにより突帯を器面に貼り付けている。むしろ極めて一般的な「手法」であるといっていよい（鐘方・中島1992、藤井2003）。治平谷11号墳・高橋仏師1号墳・高地栗谷1号墳の資料でもこの点を証明している。また、今回取り上げた3古墳には、突帯貼り付け時に板状工具による押圧がみられない点も注目される。県内では古墳時代中期末まで確認される手法で、突帯断面は台形を呈するものが多い。押圧は突帯貼り付けでは丁寧な手法で、断続ナデは時期的には後続するものとして認識している（山内2005b）。

突帯貼り付けとともに注目されるのが、突帯間隔である。今治平野の後期古墳出土の埴輪は、中期古墳の樹之本古墳（山内2001）のそれとは大きく異なる。器面貼り付け時に大きく波打っており、突帯間隔に規則性がみられるとは考えられないが、今回の資料で規則性を窺うことの可能な資料が認められた。第3図1・2は基底部長および器高、突帯断面など相違点ばかりが目立つ資料であるが、最下段突帯を揃えて突帯間隔を比較すると、約12cm間隔で一致する。治平谷11号墳の資料でも第2図5のように一致する個体も存在する。これは、器高に関係なく一定の突帯間隔で貼り付けるといふ「決まりごと」が存在していた可能性も否定は出来ない。「埋まってしまう」基底部よりも樹立された際に「見られる」突帯間隔の規則性は、古墳や小地域を越えて重要視されたのかもしれない。

基底部についても少し述べておく。基底部高は古墳の個体間および古墳間でも大きく異なる。傾向としては、治平谷11号墳・高橋仏師1号墳の資料は高く、高地栗谷1号墳はやや低めである。この点については、基底部倒立調整により基底部自体が伸びることも予想され、厳密な規格を設けることは困難である。しかし、基底部調整については細部で若干の相違がみられるものの、板状工具での強いオサエ（タタキの可能性も有り）については統一されている。今治平野の後期円筒埴輪製作では「決まりごと」の一つとして基底部倒立調整が行われているものとする。

以上の観察結果より、今治平野の後期円筒埴輪は、数量的には少ないものの外面調整や突帯貼り付け、さらに基底部調整などの点で一定の「決まりごと」を持つ個体が認められる反面、法量の点では個体間のばらつきが見られ、製作工程の簡略化が進んでいることが明らかとなった。

#### 4 他地域との比較—松山・北条平野—

松山平野における後期円筒埴輪の様相については、以前筆者がその流れについてまとめたことがあるが（山内2004）、5世紀末葉から6世紀初頭は松山平野北部で大型品と小型品の二種がみられ、中期的要素を残しつつも調整などに簡略化が進む「第1の画期」、中・大型品で調整や形態上に特徴を有する一群がみられる6世紀前半の「第2の画期」がみられる。北条平野についても同様で、常竹1号墳にみられる小型品で「基底部正立調整」の段階から、新城5号墳の大型品まで、5世紀末葉から6世紀にかけて一連の流れをみてとることは可能である（山内2005b）。しかも、新城古墳群出土の須恵質焼成の埴輪が6世紀前半から確認される点は、松山平野南部の砥部窯跡群で出土する個体と酷似し（山内2000）、埴輪窯の地域的広がりを示すものと考えられる。

しかし、今治平野では、5世紀末葉から6世紀前半に比定される円筒埴輪が確認されていない。前代の5世紀中葉から後葉にかけては、在地型と搬入品が同時にみられる樹之本古墳の資料が挙げられるが（山内2001）、その後継続的な埴輪生産が行われず。この両平野の埴輪の展開を考察するには、古墳時代後期の古墳の展開を考慮する必要がある。松山平野では5世紀末葉から6世紀前半にかけて、中・大型の前方後円墳が出現し、円筒埴輪を採用する状況が多くみられるのに対し、今治平野では同時期に古墳の展開が明瞭ではなく、円筒埴輪の採用は、高橋仏師1号墳や高地栗谷1号墳などの6世紀中葉の小・中規模の前方後円墳の出現を待たねばならないという現状が反映されているのではなかろうか。つまり、古墳群の動向や「首長墳」とされる古墳の展開と、両平野での後期円筒埴輪の出土状況は、多少なりとも連動している可能性が高く、埴輪を持つことの階層性にも発展するのかもしれない。

6世紀中葉から後葉の展開については両平野とも共通する部分が多いが、松山平野では突帯や基底部調整に多様性がみられ、ケズリを施す「基底部倒立調整」が認められる他、突帯断面形状が「M」字のほか、小さな台形状を呈するなど、小地域ごとの展開が反映されているものと思われる。また、焼成窯の存在が明らかな点（谷田窯跡群）は興味深い。

#### 5 おわりに

以上、今治平野の後期円筒埴輪資料を素材に、若干の様相と展開について述べてきたが、資料数の都合および細部の観察が不十分で雑然とした文章となった。今治平野では近年の開発により埴輪資料が増加しており、今後さらに検討が進むものと期待している。松山平野内での小地域性とあわせて、今後の検討課題としたい。

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたり、田窪一城、藤村啓修の両氏には資料観察および図面作成に際し御指導、御助言を賜り、資料実測に関しては、今治市教育委員会にお世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

（2006年2月27日）

## 参考文献

- 今治市教育委員会1979『治平谷11号墳』今治市埋蔵文化財調査報告書第4集
- 今治市教育委員会2003『高地栗谷1号墳・高橋山崎遺跡 現地説明会資料』
- 愛媛県埋蔵文化財調査センター2005「今治新都市開発整備事業に伴う埋蔵文化財調査現地説明会資料（第1・第2地区）」
- 鐘方正樹・中島和彦1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 藤井幸司2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究—窯窯焼成導入以降を中心に—」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会
- 正岡睦夫1984「高縄半島の埴輪」『遺跡 特集・愛媛の埴輪研究』第26号
- 森毅1983「今治西高校保管考古学資料 埴輪—今治地域円筒埴輪の検討—」『遺跡』第23号
- 森毅1984「愛媛県における埴輪研究の現状と課題」『遺跡 特集・愛媛の埴輪研究』第26号
- 山内英樹2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（1）—谷田2号窯出土資料の再検討」『紀要愛媛』創刊号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2001「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（2）—特徴的な形態・技法を有する埴輪について」『紀要愛媛』第2号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003a「埴輪研究の現状と課題—『基底部調整』をめぐる諸問題について—」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003b「円筒埴輪製作工程における『基底部調整』」『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』第52回埋蔵文化財研究集会
- 山内英樹2004「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（4）—松山市・二つ塚古墳資料紹介および県内資料の製作手法観察—」『紀要愛媛』第4号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2005a「高橋仏師1号墳」『愛比売—平成16年度年報—』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2005b「愛媛県出土埴輪の基礎的研究（5）—風早の埴輪資料について—」『紀要愛媛』第5号、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター



# 愛媛県内経塚覚書 1

岡田 敏彦

## 1 はじめに

国立歴史民俗博物館が実施した考古資料情報集成的研究（経塚データベース・プロジェクト）の愛媛県担当として平成13～15年度の3年間県内の経塚を回った感想などについて記してみたい。

今回対象とした「経塚」は古代の浄土信仰による末法思想等に起因する埋経行為から中世後半の六十六部廻国納経（四国八拾八箇所霊場の各寺院境内にも『奉納経四国八十八箇所心願』の標石が見られる。）や、江戸時代を中心とする一字一石経の経塚までを含め各種カードを作成するものであった。時期的には江戸時代までとして踏査に及んだが、実際に見て回ると明治以降の年号を持つ「一字一石」の標石も寺院境内・墓地・道端など随所に見ることができた。しかも、屋敷地内に営まれ、現在住まわれている方の祖父の代（明治11年）に「家内安全のために千個の石に経文を書き甕に入れて埋めた。」もので「大乘妙典 一字一石」の標石があるものまでさまざまである。

資料調査用カードは①遺跡・遺構、②経巻、③経筒（1：銅・鉄製）、④経筒（2：石・竹・木・専用土製）、⑤外容器・転用経筒、⑥鏡・合子、文献の7種類からなり、各カードは細かく記入することになっており、①遺跡・遺構カードでは遺跡名・遺構名・所在地・立地・関連寺院・経塚（種類は紙本経塚・瓦経塚・礫石経塚・その他の4種類）、遺構の特徴は地上標識（マウンド・葺き石・標石・納経塔）、地下構造（石室・詰石・土坑のみ）、外容器（使用・不明）に分類、年代のわかるものはその根拠や造営者（願主・勧進僧）を記入することになっていた。

### (1)実際の作業

作業としては、経塚資料の収集から行うこととし、全国的な経塚集成である『経塚地名総覧』（関1984）をもとに、愛媛県内では『愛媛県金石史』（正岡1965）や『伊予地方経塚地名表』（瀬戸内海歴史民俗資料館1977）などで文献に掲載された経塚を抽出することから作業を開始した。また、『愛媛県史 資料編 考古』にも村山神社・古宮・真導廃寺・奈良原山・辻ノ内・五本松・興居島・伊豫神社・堂ヶ谷・慶雲寺・三島神社・松溪の各経塚の解説があり、経筒などが過去に出土したものについて記述されている（愛媛県1981）。さらに、埋蔵文化財として登録されているものや、「市・町・村誌」の記述にもあたって地名表を作成することとした。

こうして地名表を作成したが、見落としも多く、現地調査を行う段階で追記したものが数多く存在し、カードを国立歴史民俗博物館に送付した後も、川内町内旧国道横に3基、重信町法蓮寺境内に2基、同町上林に廻国塔群、宇和町笠置峠古墳横に1基（地藏台座）など、追加の必要なものが多く見つかっている。

## (2)埋蔵文化財包蔵地一覧表掲載の経塚

埋蔵文化財包蔵地として登録されているものは、『古墓・経塚』で111箇所余、おそらく全県的に分布していると思われる近世の一字一石経塚を扱っているのは合併前の70市町村のうち16市町村で50箇所であった。単純にはいえないが、約1/4の市町村しか近世一字一石経塚を埋蔵文化財として登録していないこととなり県内の近世一字一石経塚の総数は200箇所を超える箇所数になると想定される。実際、三年間の踏査で新規確認が104箇所に上っている。しかし、寺院・墓地についてはほとんど見てないのでもっと増えるのではないかと思う。また、集落境などに設置されたものなども過疎による廃村などで失われている可能性があるなど確認の容易でないものが多くあるのではないかと考える。

埋蔵文化財包蔵地一覧表では『古墓』の分類であり、『経塚』と言えるのか確証のないものも多々見られる。中には明確な「墓」であるが、四国中央市土居町の田尾経塚は「薦田冶郎進義清墓」の改修において発見された厨子転用の経筒と紙本経であり、現在、硯寿院に納められ、「田尾経塚」として経塚地名表に登録されている（関1984）。

## 2 研究史

愛媛県内における経塚研究は1934年の奈良原神社境内における宝塔型経筒の発見を契機とし、進んだ感がある（玉田1934）。奈良原神社経塚発見以前では、1923年西園寺富水により伊豫国東宇和郡山田村永尾の岡出土鏡が経塚発見品として鏡背の拓本とともに考古学雑誌13巻9号に報告されている（西園寺1923）。1934年には伊予史談会により「愛媛県下経塚一覧」が作成され（伊予史談会1934）、同年、柳原多美雄により「菅生大宝寺境内発見の経塚」が伊予史談79号に（柳原1934）、玉田栄二郎により「奈良原神社境内経塚並に伴出物調査」が伊予史談80号に掲載され（玉田1934）、1935年には鶴久森経峯により「伊豫奈良原神社経塚」が東京考古学会の『考古学第6巻第7号』に掲載（鶴久森1935b）、同年、鶴久森経峯により「伊予奈良原神社境内経塚調査報告」史蹟名勝天然記念物10巻5・7・9号（鶴久森1935a）、玉田栄二郎により「伊予奈良原神社境内経塚」考古学雑誌25巻1号（玉田1935）、さらに、1939年、鶴久森経峯により「奈良原経塚出土国宝経筒について」が伊予史談97号に掲載されている（鶴久森1939）。昭和初期（昭和20年）までは奈良原神社経塚一色といっても過言ではない状況を示している。

その後も、奈良原神社経塚についての記述が続くが、1960年代となり1962年には松溪経塚、1963年には堂ヶ谷経塚、1966年には岩子山北山経塚など奈良原神社経塚以外の報告が行われ始める。1962年には景山春樹により「伊予出土の石刻経と石刻名号」『史跡と美術 322号』（景山1962）、1963年には経筒など工芸品的な遺物ではなく石経に注目した調査が行われ（愛媛県教育委員会1963）、1965年には正岡建夫により「愛媛県金石史」が記され、金石編（堂ヶ谷経筒）・石経編（辻ノ内・長正寺・乗禅寺・石手寺・大日堂・長泉寺墨書・大平墨書・大宝寺墨書・本願寺墨書・千鳥塚墨書・鯨谷墨書・城徳寺墨書・鳴山墨書・八幡神社墨書・山財墨書）が紹介されている（正岡1965）。

1970年代には奈良国立博物館により『経塚遺宝展』が行われ、愛媛県内経塚出土遺物も展示さ

れた（奈良国立博物館1972・1973）。県内での調査・研究では1974年、愛媛県教育委員会による真導廃寺の発掘調査において鉄製椀を中央に埋納した礫石経塚の発見や（長井1976）、1975年、今治市教育委員会により「三尾の上経塚」の調査が行われるなど新資料の発見・調査が断片的に行われるとともに（今治市教育委員会1975）、1977年発行に真導廃寺跡発掘調査報告書において『愛媛県経塚一覧』が掲載され（愛媛県1977）、さらに、香川県立瀬戸内海歴史民俗資料館によって瀬戸内海周辺各県の経塚研究が行われ『経塚地名表』などにより新資料の紹介等が行われた（瀬戸内海歴史民俗資料館1977）。

1980年代、愛媛県では県史の編集が行われ、経筒出土の経塚や礫石経として注目された辻ノ内経塚が掲載されている（愛媛県1981）。合わせて県史の経塚の項目を担当した野口光比古により三島神社・伊予神社の経塚が考古学ジャーナルや古代研究に発表された（野口1980・1982）。研究対象はこの段階でも工芸品として注目される遺物が出土した経塚であるが、他方、「立正大学53号」に高知県の岡本桂典により『伊予出土の刻石経』なども発表された（岡本1983）。

1990年代、立正大学考古学研究室編『礫石経の世界』には岡本桂典により四国各県の礫石経の現状報告が行われている（岡本1994）。また、この頃は開発工事に伴う発掘調査事例に経塚関連報告が散見され始める時期でもある。

しかし、愛媛県内の経塚研究の現状を見ると盛んとはいいがたく、埋蔵文化財からの取り組みはほとんどない状況である。今回の調査により多くの経塚を地名表に追加してはいるが、所詮は一人でのごく限られた期間内での踏査のため、すべての経塚について調査を行ったものではない。また、周辺住民に認知されていないものも多くある反面、現在も信仰の対象として手入れのゆきとどいた経塚も見られた。

### 3 特筆すべき経塚出土品

愛媛県内にも多くの経塚が確認され、すでに記したように愛媛県史でも12箇所の経塚について記述されている。特に出土品が国宝指定を受けている奈良原山経塚をはじめとした出土経筒は逸品ぞろいといっても過言ではない。興居島経塚・五本松経塚などの出土品は東京国立博物館保管であり、奈良国立博物館での経塚特別陳列「経塚出土陶磁器5『中国・四国地方に埋納されたもの』」の表紙を飾った伝北条市出土飛鳥文外容器や裏表紙の興居島経塚青白磁経筒等がある（奈良国立博物館1999）。

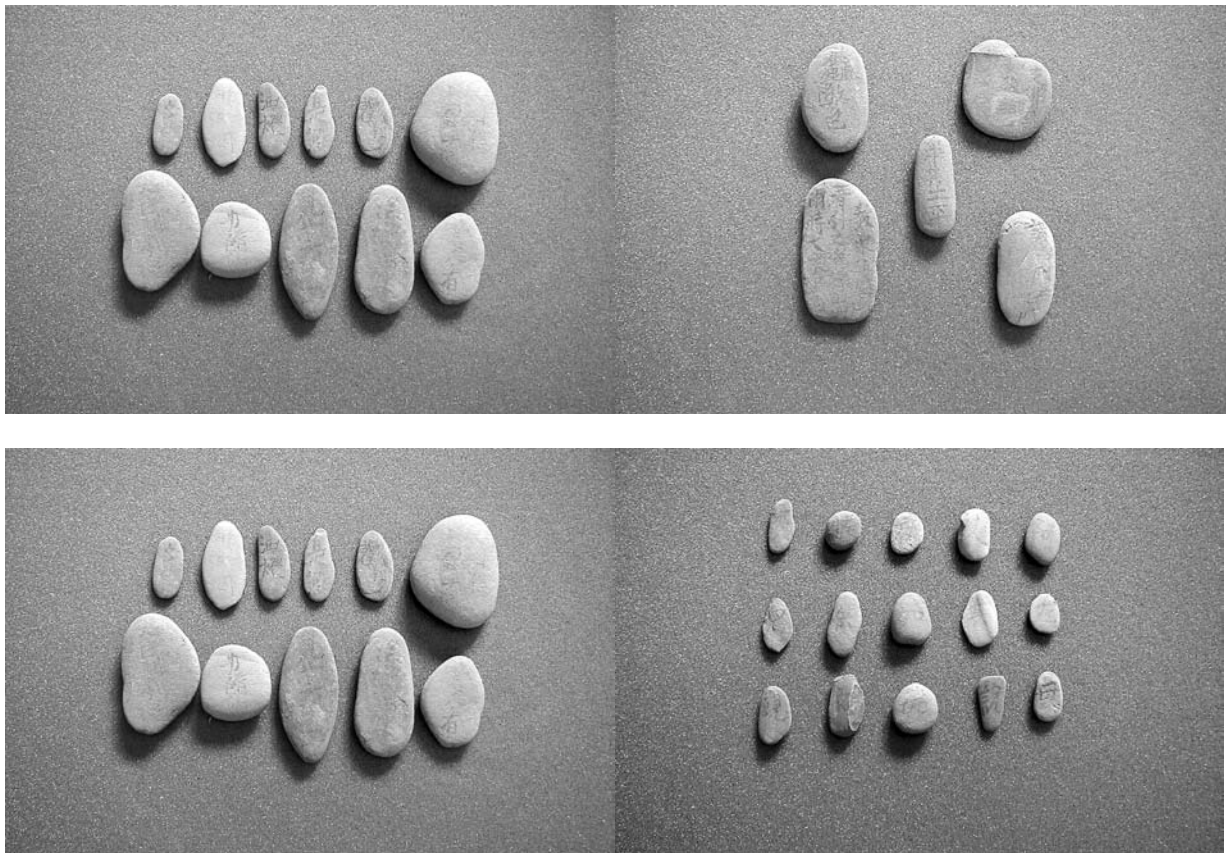
また、北条市善応寺の石経は愛媛県有形文化財（考古資料）、伊予市堂ヶ谷経塚の金銅製経筒も愛媛県有形文化財（工芸品）となっている。しかし、興居島経塚は「埋蔵文化財包蔵地」にはなっていない。過去に掘り出されており外表施設がないためではあるが、経塚が造られた場所にも意味があることから場所の特定は必要である。興居島経塚は従来、愛媛県史で姫坂神社の丘陵上方お旅所付近とし「松山市興居島1番地」出土となっているが、地元で言われている出土地は「松山市泊1359番地」で、船越和気比売神社の裏手丘陵中腹とのことである。全国的に有名な経塚でさえこの状況であり、早い時期に本来の埋納位置を特定しておかないと誤った情報を後世に残すこととなる懸念がある。

#### 4 県内に多い近世一字一石経塚

一字一石経塚の場合、地下に埋納するものと地表に積み上げるものが見られる。地下に埋納するものでも、伊予市上三谷の圃場整備事業に伴って発掘調査を実施した「上三谷経塚」のように四角形の石室を造り、その中に礫石経を埋納、外表施設として標石（元文六年 施主 吉兵衛）を立てた丁寧な構造で調査段階において明瞭に判断できるものから（愛媛県埋蔵文化財調査センター1984）、県道拡幅に伴う発掘調査の際、検出した「道後町経塚」のように素掘りの土坑内に礫石経を埋納しただけのもの（周辺に近世墓が広がっているが墓標はすでになくなっており、経塚設置時には何らかの外部施設があったものかもしれない。：報告書内では第10章近世以降の遺構 第2節土坑のSK329として報告、報告書抄録にも『経塚』の呼称は記載されていない。）まで、検出した構造はさまざまである（愛媛県埋蔵文化財調査センター2005）。地表に積み上げたものは使用している石材も大型で長辺が20cm程度有り、一字一石ではなく多字または名号を記したものとなっている。

##### (1)一字一石経塚の設置場所

寺院境内・個人墓地内・共同墓地内・集落の境界・その他特定の場所（ため池など水利等）・古墳の墳丘を利用したものなどが見られる。また、現状で多くの経塚標石を見ることができるのは寺院境内（浄土寺・大山寺・八坂寺・吉祥寺）が多い。これは寺院周辺の墓地改葬や寺院の統



図版1 道後町経塚（道後町遺跡 SK329）出土墨書経石（愛媛県埋蔵文化財調査センター2005）

廃合によって集められたものも多く、その場合、本来の建立場所は不明である。現在でも各種事情によって移設される経塚（朝倉浅地経塚（圃場整備）・西条坂元山ノ神経塚（四国縦貫自動車道））がある反面、工事等により所在不明となった経塚（福武山経塚・福武山の神経塚・福武山の下経塚（四国縦貫自動車道）、市倉経塚、和泉経塚（国道56号））も見られる。

## (2)経塚建立の理由

なぜ経塚が建立されたかがわかっているものもあるがその多くは飢饉等災害に起因するもので、菊間町浜では天明の飢饉後、天明4年（1784）に村の中央と東西南北にそれぞれ標石を建立。松山市安城寺町では享保の飢饉の後、供養のため50年後（安永10年：1781）その20年後（享和元年：1801）、更に30年後（天保2年：1831）、その後は50年毎（明治14年：1880・昭和5年：1930・昭和55年：1980）に標石が新たに建てられている。この2箇所の経塚では菊間町は埋蔵文化財として登録されているが松山市は埋蔵文化財としては登録していない。松山市のほうは現代でも供養の対象となっており、縄文・弥生時代の住居跡や古墳のように「遺跡」とは言いにくい状況が見られる。また、明治期以降の近代の一字一石経塚も多く、現在でも新たな経塚の建立が見られる。（四国へんろの方による納経・一字一石＝大山寺）

## 5 おわりに

今回の踏査では愛媛県内にも多くの経塚があり、地元で大切にされているものがある反面、出土した経筒などは工芸品として高い評価を受けているが出土した場所や状況については情報が限られていることが多いことも明確となった。その反面、教育委員会・公民館などを中心とした地元住民の活動により、石造物の詳細な分布調査が実施されている地域があることも判明した。しかし、その対象は石造物としての五輪塔や宝篋印塔などであり、角柱型標石や石碑型標石はあまり顧みられない状況にある。そのような見落とされがちなものにも、地域の飢饉・水害など自然災害などの歴史や事象に立ち向かった先人の営みが記されており、分布状況を把握することで新たに浮かび上がってくる地域史もあるのではないかと思う。

経塚は形態もさまざまであること、墓地内に所在するなど住民と密接な関係にあるものが多く、一人で県内すべての経塚を調べることは困難であるが、この文章を見て「そんなものなら自分の住んでいる所にもある。」「むかし古老から聞いたことがある。」などの情報を地道に集め積み上げていく必要がある。

一字一石経塚研究について全国に目を向けると、江戸時代の宗教活動の所産として仏教各宗派の布教活動と連動した研究なども行われており、県内においても埋蔵文化財からの調査だけではなく民俗学・宗教学などと連動した調査・研究が必要であると痛感している。

最後に、今回の資料はきわめて不備なものであり「もっとよく調べろ。」とのお叱りが各方面から出るとは思うが、今回の文章が、地域ごとの分布や言い伝えが途切れることなく後世に伝わるきっかけの一助となれば幸いである。

今後は、発掘調査で内容の判明している経塚の紹介や各地域の分布調査結果などについて記して行くこととしたい。

今回の経塚調査にあたり、「佐倉の歴史民俗博物館で経塚の集成を行う予定なので愛媛県内について担当してみないか。」と声をかけていただいた愛媛大学の吉田広氏、調査期間を通じご指導いただいた国立歴史民俗博物館の村木二郎氏に文末となりましたが感謝する次第です。

なお、今回の調査結果については、「1 はじめに」で記した資料カードの各項目を整理し、国立歴史民俗博物館から公開されることになっています。

(2006年2月22日)

## 参考文献

- 池内長良1987「災害と飢饉」『愛媛県史 近世下』
- 石田茂作1967「奈良原山経塚遺物」『仏教美術の基本』
- 今治市教育委員会1973『重要文化財宝篋印塔〈今治市野間部落〉修理並びに環境整備工事報告書』
- 今治市教育委員会1975『今治市埋蔵文化財調査報告』書2集
- 今治市教育委員会1990『ふるさと今治の文化財』
- 伊方町教育委員会2003『伊方の文化財』
- 伊方町教育委員会・町見郷土館2004『伊方の石造物調査報告書Ⅰ』
- 伊予史談会1934「愛媛県下経塚一覧」『伊予史談』79
- 伊予三島市1984『三島市史』
- 伊予三島市教育委員会1997『伊予三島市の文化財』
- 鵜久森経峯1935a「伊予奈良原神社境内経塚調査報告」『史蹟名勝天然記念物』7・9・10-5
- 鵜久森経峯1935b「伊予奈良原神社経塚」『考古学』第6巻第7号
- 鵜久森経峯1939「奈良原経塚出土国宝経筒について」『伊予史談』97
- 内子町教育委員会1993『内子町埋蔵文化財確認調査報告書(1)』
- 内子町教育委員会1995『内子に見る石の文化』
- 内子町教育委員会1997『内子町埋蔵文化財確認調査報告書(3)』
- 愛媛県1965「愛媛県編年史」
- 愛媛県1981『愛媛県史 資料編 考古』
- 愛媛県教育委員会1963「愛媛県の文化財」『石経調査報告書』
- 愛媛県教育委員会1972『文化財総合調査報告書』
- 愛媛県教育委員会1974『埋蔵文化財包蔵地一覧表 昭和49年度』
- 愛媛県教育委員会1977『伊予国真導廃寺跡発掘調査報告書』
- 愛媛県教育委員会1977「愛媛県経塚一覧表」『伊予国真導廃寺跡発掘調査報告書』
- 愛媛県教育委員会1977『埋蔵文化財包蔵地一覧表 昭和52年度』
- 愛媛県教育委員会1982『埋蔵文化財包蔵地一覧表 昭和57年度』
- 愛媛県教育委員会1992『埋蔵文化財包蔵地一覧表 平成4年度』
- 愛媛県教育委員会2000『埋蔵文化財包蔵地一覧表 平成12年度』
- 愛媛県教育委員会2002『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—石造物編—』

愛媛県文化財保護委員会1962「愛媛県東宇和郡野村町松溪経塚出土品」『埋蔵文化財要覧』3  
 愛媛県埋蔵文化財調査センター1984『上三谷古墳群』  
 愛媛県埋蔵文化財調査センター1994『四国縦貫道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ 丹原町編』  
 愛媛県埋蔵文化財調査センター1995『四国縦貫道埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ 伊予市編1』  
 愛媛県埋蔵文化財調査センター2005『道後町遺跡Ⅱ』  
 愛媛新聞社1984「経塚？供養の塚？ 一万個に写経文字」『愛媛新聞』1984年1月28日朝刊  
 大洲市教育委員会1974『文化財遺跡調査報告書』第1輯  
 岡田敏彦1993「奈良原山経塚」『考古学の世界④ 中国・四国』  
 岡本健児1978「経塚の地域的分布 四国」『考古学ジャーナル』153  
 岡本桂典1983「伊予出土の刻石経」『立正史学』53  
 岡本桂典1994「磔石経の世界 四国」『軛全舎』  
 景山春樹1962「伊予出土の石刻経と石刻名号」『史跡と美術』322  
 景山春樹1974「伊予出土の石刻経と石刻名号」『仏教考古とその周辺』  
 菊間町1979『菊間町誌』  
 菊間町教育委員会2001『越智西部広域農道関連道路「町道横断線改良工事」に伴う埋蔵文化財調査報告書 菊間町埋蔵文化財調査報告書第1集』  
 蔵田蔵1966「経塚論11・四国地方出土の経塚遺物」『MUSEUM』179  
 蔵田蔵1973「経塚遺宝展」『月間文化財』  
 小山富士夫1948「我国遺跡出土の支那地域磁器」『古美術』18-7  
 西園寺富水1923「伊予山田村の遺物」『考古学雑誌』19-9  
 西条市教育委員会1988『西条の文化財』  
 西条の歴史探訪刊行会1985『西条の歴史探訪』  
 品部清隆1966「奈良原神社経塚出土品発掘状況について」『愛媛の文化』3  
 関秀夫1984「経塚地名総覧」『考古学ライブラリー 24』  
 瀬戸内海歴史民俗資料館1977『伊予地方経塚地名表』  
 瀬戸内海歴史民俗資料館1978「四国の経塚 新資料の紹介と若干の比較」『瀬戸内歴史民俗資料館年報1978』  
 玉田栄二郎1934「奈良原神社境内経塚並びに搬出物調査」『伊予史談』80  
 玉田栄二郎1935「伊予奈良原神社境内経塚」『考古学雑誌』25-1  
 長井数秋1974「愛媛県魚島村の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』4号  
 長井数秋1976「真導廃寺経塚遺跡」『日本考古学年報 1974年版』  
 奈良国立博物館1972『国宝・重要文化財仏教美術 四国2』  
 奈良国立博物館1973『経塚遺宝展（展示目録）』  
 奈良国立博物館1977『経塚遺宝』  
 奈良国立博物館1999「中国・四国地方に埋納されたやきもの」『経塚出土陶磁展五』  
 新居浜市教育委員会1986『新居浜の文化財』  
 西田栄・松岡文一1966「愛媛県松山市岩子山北山経塚」『日本考古学年報 1964年版』

- 野口光比古1980「愛媛県三島神社経塚」『考古学ジャーナル』173
- 野口光比古1982「愛媛県伊予神社経塚」『古代研究』24
- 双海町教育委員会1996『双海の文化財』
- 保坂三郎1960「銅宝塔－伊予国奈良原山経塚社」『考古学雑誌』45-4
- 保坂三郎1966「伊予国奈良原山経塚出土銅宝塔について」『国宝鞍馬山経塚遺物修理報告書』
- 正岡建夫1965「愛媛県経塚一覧表」『愛媛県金石史』
- 正岡睦夫1983「今治市日高の丘陵とその周辺の考古学的調査」『遺跡』24
- 三瓶町「姫塚」『<http://www.city.seiyo.ehime.jp/mikame/same/info-main.html> 伝統・文化・産業』
- 三宅千代二1958「東宇和出土経筒について（松溪経塚出土品）」『伊予史談』149
- 三宅敏之1963「伊予市堂ヶ谷経塚」『日本仏教』18
- 三宅敏之1972「愛媛県松溪経塚について」『MUSEUM』251
- 柳原多美雄1934「菅生大宝寺境内発見の経塚」『伊予史談』79



第1表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	標石刻字	備考
1	宝塚	伊予三島市寒川	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
	経ヶ岡遺跡(古墳)	伊予三島市下柏			◎	◎	◎	◎	◎				経ヶ岡古墳 発掘調査
2	平田観音堂1号	伊予三島市柏								弘化二年	1845	大乘妙典一石一字塔	法観老納勢○龜山人 頂○妙法蓮華經全部 乃一字一石書以埋之 時弘化二年
3	平田観音堂2号	伊予三島市上柏								弘化三年	1846	普門品一字三禮	
4	疎水公園一字一石	土居町津根	◎	◎						文化七年	1810	奉納大乘妙典一石一字塔	
5	村山神社宝塚	土居町津根	◎	◎									村山神社
6	田尾経塚	土居町小林	◎		◎								藤田治郎進義清墓と同じ
	藤田治郎進義清墓	土居町小林	◎										紙本経・経筒(福寿院)
7	古宮経塚	新居浜市清住	◎	◎									市考古資料(郷土美術館)
8	大生院石経	新居浜市大生院											徳衛門川改修
9	法華堂一字一石群	新居浜市大生院								元治元年	1864	南無妙法蓮華經	3基は明治期(十五箇)無妙法蓮華經大乘妙典一字一石一塔・三十一)
10	正法寺納経塔	新居浜市大生院								天保二年	1831	諸国靈場納経供養塔	
11	真導院寺	西条市中野	◎	◎					◎				発掘調査
12	福武山経塚(八堂山)	西条市福武	◎	◎									自動車道敷地
13	福武山の神経塚	西条市福武	◎	◎									自動車道敷地
14	西ノ川原1号経塚	西条市福武	◎	◎									
15	西ノ川原2号経塚	西条市福武	◎	◎									
16	西後経塚	西条市千町	◎	◎									
17	藤之石布田経塚	西条市藤之石布田	◎	◎									2基?
18	下福経塚	西条市中野	◎	◎									
19	東原経塚	西条市州之内	◎	◎									
20	東谷経塚	西条市西泉	◎	◎									
21	坂元山の神経塚	西条市坂元	◎	◎									
22	摩訶寺経塚(中野)	西条市中野	◎	◎									自動車道敷地・移転
23	中野経塚	西条市中野			◎								
24	亀の甲経塚	西条市飯岡	◎	◎									自動車道敷地
25	福武山の下経塚	西条市福武	◎	◎									
26	駄馬の観音堂経塚	西条市福武	◎	◎									
27	釜の口経塚	西条市中野	◎	◎									刀・鏡(市博物館)
28	長谷経塚	西条市水見	◎	◎									自動車道敷地
29	市倉経塚	西条市中野	◎	◎									場所不明(開発破壊?)
30	大平経塚	西条市荒川	◎	◎									芸予地震で南半崩壊積み替え
31	近江神社経塚	西条市千町	◎	◎									10基
32	黒瀬経塚	西条市大保木			◎								
33	水見経塚古墳(西町)	西条市水見			◎				◎				発掘調査
34	西町経塚	西条市水見			◎								
35	土居経塚古墳	土居経塚古墳											消滅
36	川原谷経塚	小松町新屋敷											小松町友澤氏確認現物不明
37	法安寺経塚	小松町北方	◎	◎									
38	格蔵山	小松町格蔵山	◎	◎									新居浜郷土美術館保管
39	安養寺経塚	丹原町安養寺											発掘調査

第2表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	石刻字	備考
37	実報寺経塚	東予市実報寺			◎				◎				東京国立博物館
38	福成寺経塚(石積塚)	東予市福成寺			◎								
39	蓮池上経塚(蓮池)	今治市野間	◎	◎		◎	◎						
40	野間経塚	今治市野間	◎	◎		◎	◎						
41	柳田経塚	今治市柳田	◎	◎		◎							
42	宮ノ背経塚	今治市山路	◎	◎		◎							
43	阿方経塚	今治市阿方	◎	◎									
44	阿方廻国塔	今治市阿方	◎	◎						元文二年	1734	日本廻国供養	当村住人 須圓自覚
45	延喜1号経塚	今治市延喜	◎	◎		◎							
46	延喜2号経塚	今治市延喜	◎	◎		◎							
47	乗禪寺経塚	今治市延喜			◎		◎						
48	妙珍経塚	今治市宅間	◎	◎		◎	◎						
49	坪の内経塚	今治市野間	◎	◎		◎	◎						
50	長円寺跡経塚	今治市野間	◎	◎		◎	◎						
51	清水1号経塚	今治市五十嵐	◎	◎		◎							
52	三尾の上経塚	今治市野間	◎	◎									
53	宅間水田遺跡	今治市宅間	◎	◎									発掘調査
54	御辨経塚	今治市小泉	◎	◎									和鏡
55	浅地経塚	朝倉村上之村	◎	◎		◎	◎						
56	三反地経塚	玉川町三反地	◎	◎		◎	◎						
57	別所経塚	玉川町別所	◎	◎									
58	奈良原山経塚	玉川町木地	◎	◎		◎	◎		◎				経筒等国宝・町史跡・奈良原神社(町近代美術館)
59	奈良原山2号経塚	玉川町木地											
60	蓮如上人経塚	玉川町御厨	◎	◎									
61	釈迦堂経塚1号	玉川町桂	◎	◎		◎							
62	釈迦堂経塚2号	玉川町桂	◎	◎		◎							
63	中村経塚	玉川町中村	◎	◎									
64	上ノ山経塚	玉川町小嶋部	◎	◎									
65	星浦経塚	大西町星浦	◎	◎									経筒
66	井手家	大西町新町	◎	◎									一字一石経石を大楠の下に祀った。
67	白岩経塚	菊間町種	◎	◎		◎	◎						発掘調査
68	常力宝篋印塔	菊間町種	◎	◎									芸予地震で一部倒壊 町有形文化財
69	常の鼻経塚	菊間町種			◎	◎	◎						
70	長津神社(天王山)裏経塚	菊間町長坂	◎	◎		◎	◎						
71	太郎坊経塚	菊間町浜	◎	◎									
72	大乗妙典一字一石中経塚	菊間町浜	◎	◎						天明四年	1784		
73	大乗妙典一字一石東経塚	菊間町浜	◎	◎									
74	大乗妙典一字一石西経塚	菊間町浜	◎	◎									
75	大乗妙典一字一石南経塚	菊間町浜	◎	◎									
76	大乗妙典一字一石北経塚	菊間町浜	◎	◎									
77	福田経塚	吉海町福田	◎	◎									町有形文化財
78	地蔵山経塚	吉海町名	◎	◎									
79	井ノ谷経塚	吉海町井ノ谷	◎	◎									
80	武志城跡 水場経塚	吉海町水場	◎	◎		◎	◎						個人蔵
81	桜ヶ森経塚	吉海町泊	◎	◎									
	田浦経塚	吉海町田浦	◎	◎									

第3表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	標石刻字	備考
82	名駒城山経塚	吉海町名駒	◎	◎									
83	證明寺経塚	宮窪町宮窪	◎	◎									
84	海南寺墓地経塚(寺山)	宮窪町宮窪	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
85	土生経塚	宮窪町宮窪	◎	◎									
86	立石経塚	宮窪町友浦	◎	◎									
87	友浦薬師経塚	宮窪町友浦	◎	◎									
88	四番札所経塚	宮窪町余所国	◎	◎									
89	古殿経塚	魚島村古殿	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
90	中学校裏経塚	魚島村神ヶ市	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
91	篠塚経塚	魚島村神ヶ市	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
92	五穀山経塚	生名村五穀山	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
93	甘崎の経塚	上浦町甘崎	◎										
94	大原経塚	上浦町大原	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
95	蓮台寺経塚	北条市本谷	◎	◎	◎	◎	◎	◎					北條ふるさと館 芸予地震で一部倒壊
96	善心寺経塚	北条市善心寺	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎				
97	辻ノ内経塚	北条市善心寺	◎	◎	◎	◎	◎	◎					
	大日堂経塚												
	日浦経塚		◎	◎	◎	◎	◎	◎					
	長正寺経塚												
	伝北条市飛鳥文外容器												
98	八幡遺跡 経塚(猿塚)	重信町下林	◎	◎									
99	香積寺①	重信町田窪								明和七年	1770	法華一字一石	法室妙蓮信女菩提
100	香積寺②	重信町田窪								嘉永六年	1853	大乘妙典一字一石	稲葉政太良寫
101	香積寺④	重信町田窪								文化八年	1811	近藤平之右門	
102	香積寺④(廻国)	重信町田窪								宝曆十年	1760	大乘妙典日本廻国供養	
103	五本松経塚	中島町大浦			◎	◎	◎	◎	◎				東京国立博物館
104	和泉経塚	松山市和泉			◎	◎	◎	◎					道路敷
105	西大池経塚	松山市上野			◎	◎	◎	◎					溜池の中
106	興居島経塚	松山市泊			◎	◎	◎	◎	◎				東京国立博物館
107	岩子山経塚(岩子山北)	松山市北斎院			◎	◎	◎	◎		壽永二年	1183		
108	石手寺経塚(石手町経塚)	松山市石手			◎	◎	◎	◎					
109	石手経塚	松山市石手			◎	◎	◎	◎					
110	石手寺①	松山市石手								宝曆九年	1759	大乘妙典一字一石	
111	石手寺②	松山市石手								?		大乘妙典一字一石	
112	石手寺③	松山市石手								明和三年	1766	大乘妙典一字一石	
113	石手寺廻国塔	松山市石手								?		奉納大乘妙典八十八部廻国	
114	安祥寺門前	松山市安城寺								安永十年	1781	大乘妙典一字一石	妙法蓮華経 如來神力品等二一 在功桑原村 現無量神力経石山 西蔵六月 享和元
115	経石山古墳前方部	松山市桑原								享和元年	1801	妙法蓮華経	
116	経石山古墳後円部	松山市桑原								?			
117	南江戸東之池	松山市南江戸								文政九年	1826	奉書写 妙経一字一石塔	
118	窪野本組	松山市窪野								明治二年	1869	一字一石塔	石塔は明治期、ただし横の石灯籠は文政期
119	窪野廻国塔	松山市窪野								文化十年	1813	奉納大乘妙典日本廻国	
120	浄瑠璃寺	松山市浄瑠璃										妙法一字一石	集積されており詳細不明
121	八坂寺	松山市浄瑠璃								文政七年	1824	奉納大乘妙典一字一石	鐘つき堂裏

第4表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	標石刻字	備考
122	浄土寺①	松山市鷹ノ子								宝曆五年	1755	大乘妙典一字一石	方柱
123	浄土寺②	松山市鷹ノ子								?		奉納大乘	
124	浄土寺③	松山市鷹ノ子								?		奉納大乘妙典	
125	太山寺①	松山市大山寺								?		大乘妙典一字一石塔 為如徹居士 菩提 施主北村與兵衛	
126	太山寺②	松山市大山寺								文政十一年	1828	奉納経四国八十八箇所心願 大乘妙典	
127	太山寺③	松山市大山寺								?			
128	妙見寺	松山市平田								寛政九年	1797	南無妙法蓮華経	奉書寫大乘経一字一石
129	宝塔寺	松山市朝日ヶ丘								宝曆	1751~1763	妙経一字一石塔	複数
130	道後町	松山市道後											
131	十合経塚	伊予市上吾川	◎	◎									
132	市ノ坪経塚	伊予市上吾川	◎	◎									
133	福田寺経塚	伊予市上吾川	◎	◎							1681~1683	大乘妙典一字一石	
134	福田寺裏山経塚	伊予市宮下											発掘調査
135	小野経塚(堂ヶ谷経塚)	伊予市大平	◎	◎	◎	◎	◎	◎		久安六年	1150		個人蔵
136	長泉寺経塚(宮ノ下経塚)	伊予市宮ノ下			◎	◎	◎	◎		文永二年	1265	妙法経奉納所	富尾寺願主日蓮 2基内1基発掘調査
137	稲荷	伊予市稲荷											発掘調査
138	あまが谷	伊予市稲荷											発掘調査
139	上三谷A経塚	伊予市上三谷								元文六年	1741	大乘妙典一字一石塔 施主 吉兵衛	発掘調査
140	上三谷B経塚	伊予市上三谷								天明三年	1783	奉供養法花経一字一石塔	楠本重右門 愛媛県歴史民俗資料館
141	伝上三谷経塚出土鏡	伊予市											
142	上三谷墓地①	伊予市上三谷								寛政九年	1797	大乘〇〇	
143	上三谷墓地②	伊予市上三谷								寛政九年	1797	奉納大乘妙典一字一石塔	
144	上三谷墓地③	伊予市上三谷								文化八年	1811	大乘妙典一部〇〇	
145	上三谷墓地④	伊予市上三谷								文政二年	1819	大乘妙典〇〇	〇政二巳卯月の干支より文政二年と判断
146	上三谷墓地⑤	伊予市上三谷								文久元年	1861	奉妙法経一基供養塔	
147	上三谷墓地⑥	伊予市上三谷								?		大乘妙典一字一石〇供養塔	施主 当村喜三左衛門
148	上三谷墓地⑦	伊予市上三谷								?		大乘妙典一字一石	
149	米湊①	伊予市上三谷								文化十一年	1814	奉供養大乘妙典一字一石	
150	米湊②	伊予市米湊								天保十一年	1840	奉書寫大乘妙典一字一石	為貫運道盛居士菩提 乃至法界平等利益
151	小湊③	伊予市米湊								嘉永四年	1851	凡字 奉納大乘妙典一字一石塔 静定妙盛大師追福也	
152	大平	伊予市米湊								嘉永二年	1849	妙法蓮華 八軸一字一石供養塔	
153	伊予神社	松前町神崎	◎							安永八年	1779	奉書寫 供養大乘妙典 一字一石	伊予神社
154	吉祥寺①	松前町出作				◎				文化十年	1813	奉納一字一石	
155	吉祥寺②	松前町出作								安政四年	1857	大乘妙典一字一石	
156	麻生金毘羅権現	砥部町麻生								元禄十四年	1701	一石一字御経供養	
157	宮内経塚	砥部町原町			◎								上原町と同じ
158	上原町経塚(宮内)	砥部町上原町					◎						東京国立博物館蔵?
159	カンヤ	中山町											
160	トチ谷	中山町											
161	本覚寺墓地①	双海町上灘								文政二年	1819	奉書寫法華経一字一石供養塔	曾根茂治郎
162	本覚寺墓地②	双海町上灘								?		大乘妙典塔	周辺墓石は天保・文政
163	本覚寺墓地③④	双海町上灘								文政十一年	1828	奉書寫法華経一字一石乙部	一对 奥島五左衛門豊胤・奥島傳三郎基長

第5表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	標石刻字	備	考
163	下浜	双海町下灘								享保	1716~1735			
164	高野川	双海町高野川								寛延三年	1750	奉納一字石之塔		
165	明杖墓	久万町上畑野川	◎	◎										
166	法院墓	久万町直瀬	◎	◎										
167	大宝寺経塚	久万町菅生			◎									
168	大宝寺参道廻国塔	久万町菅生								文政十一年	1828	奉納大乘妙典日本廻国		
169	京ヶ森経塚(慶昌寺)	小田町寺村	◎											
170	慶雲寺経塚	大洲市五郎	◎	◎					◎					個人蔵?
171	程内経塚	内子町大瀬	◎	◎					◎					
172	石浦経塚	内子町五百木	◎											発掘調査
173	正覚寺	内子町論田	◎											
174	尼の森	内子町論田												
175	福岡町大師堂	内子町城廻								慶応二年	1866	南無妙法蓮華経奉書寫大乘妙典一字一石塔		
176	村前竹之瀬	内子町村前								正徳四年	1714	石字法華結縁之塔		祇園牛頭天王社石字
177	千鳥姫経塚	八幡浜市合田		◎					◎					
178	鯨谷経塚	八幡浜市五反田		◎					◎	文和二年	1353	如法経奉納所		
179	高德寺薬師堂	八幡浜市双岩								文化十年	1813	一字一石		
180	城徳寺跡経塚	保内町西之河内		◎					◎					
181	太山寺堂	伊方町九町奥								寛政元年	1789	大乘妙典一石一字塔		
182	加周六十六部廻国塔	伊方町加周								文化四年	1807	日本廻国供養塔		
183	加周六十六部廻国塔	伊方町加周								文政四年	1821	奉納大乘妙典六十六部供養		
184	加周六十六部廻国塔	伊方町加周								文化七年	1810			
185	鳴山経塚	三瓶町鳴山		◎					◎					
186	三島神社経塚	宇和町神領	◎	◎					◎					三島神社
187	郷内1号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
188	郷内2号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
189	郷内3号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
190	郷内4号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
191	郷内5号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
192	郷内6号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
193	郷内7号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					不明
194	郷内8号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
195	郷内9号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
196	郷内10号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
197	郷内11号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
198	郷内12号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
199	郷内13号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
200	郷内14号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
201	郷内15号経塚	宇和町郷内	◎	◎					◎					
202	木麗寺経塚	宇和町郷内												
203	岩木神社経塚	宇和町岩木	◎	◎										
204	岩木三瓶神社経塚	宇和町岩木	◎	◎										
205	安養寺経塚	宇和町岩木	◎	◎										
206	上松葉経塚	宇和町上松葉	◎	◎										
207	上松葉	宇和町上松葉								文化九年	1812	妙経一字一石		

第6表 愛媛県内経塚一覧表

番号	遺跡名	住所	H12	H4	S59	S57	S52	S49	県史	年号	西暦	標石刻字	備	考
208	伊賀上経塚	宇和町伊賀上	◎	◎										
209	明石寺池の禰尼経塚	宇和町												
210	明石寺廻国塔	宇和町								天保三年	1832	奉納大乗妙典六十六部日本廻国供養塔		
211	松溪経塚	野村町松溪	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	宝永七年	1710	地藏尊台座一字一石塔	奈良国立博物館	
212	永照寺	野村町十夜野			◎								墓地改裝不明	
213	山財経塚	津島町山財			◎								場所不明	
214	大島経塚	御荘町大島			◎									
215	八幡神社経塚	御荘町八幡野			◎									
	積善寺一字一石													
	本覚寺墓地	双海町上灘								明治十一年	1878	南無三部妙典塔		
	阿方一字一石	今治市阿方1397								明治十一年	1878	大乘妙典一字一石	家内安全のため千個の石に経文を書き瓶に入れて埋めた。	
	法蓮寺一字一石1	重信町上林												
	法蓮寺一字一石2	重信町上林												
	高智廻国塔群	重信町上林												町指定
	谷廻国塔群	重信町上林												町指定
	花山廻国塔群	重信町上林												町指定
	竹の鼻	川内町												
	笠置峠経塚	宇和町												
	正八幡神社上経塚	北条市小川												亀山焼きカメ
	正八幡神社中経塚	北条市小川												
	正八幡神社下経塚	北条市小川												
	永福庵跡一字一石	北条市小川								享保六年	1721	大乘妙典一字一石	覚夢有居士	
	観音堂横一字一石	北条市小川								享保四年	1719	大乘妙典一字一石	覚夢有居士	
	大森家墓地一字一石	北条市小川										法華経一字一石	小川郷六代大森盛重	
	光明寺法華塔	川之江市金生町通町												
	大光寺供養塔	川之江市金田町半田												
	笹山経塚	一本松町								宝暦八年	1758			
	一字一石像	野村町横林板石												
	経塚	重信町牛淵												
	寺山墓地	宮窪町												伝承 牛淵の村移りと経塚
	長泉寺	波方町								元文二年	1737	奉納大乘妙典 書写一字一石一部 一頁元無居士 維 元文二〇舎 丁巳仲秋日	観性妙喜大師 施主 波止浜住 長泉寺住持 法印奇賢	
	池原経ノ塚	菊間町池原												五輪塔残欠等
	仁田之浜廻国塔①	伊方町仁田之浜観音谷								文政二年	1819			
	仁田之浜廻国塔②	伊方町仁田之浜クヌギ山								天保五年	1834	奉納大乘妙典日本廻国供養 行者勳介 泰平 五月廿二天 四月初五日	五輪塔型	

番号は今回のデータベース資料の①遺跡・遺構カードの番号。番号なしは資料カード未作成のもの  
市町村名は平成合併前の70市町村区分

H12は愛媛県教育委員会平成12年度版遺跡台帳記載遺跡

S59はニューサイエンス社考古学ライブラリー『経塚地名一覧』掲載遺跡

S52は瀬戸内歴史民俗資料館編『経塚地名表』掲載遺跡

県史は愛媛県史原・古代資料編掲載遺跡

H4は愛媛県教育委員会平成4年度版遺跡台帳掲載遺跡

S57は愛媛県教育委員会昭和57年度版遺跡台帳掲載遺跡

S49は愛媛県教育委員会昭和49年度版遺跡台帳掲載遺跡

## 編集後記

研究紀要『紀要愛媛』第6号が完成いたしました。

多田は香川県西方遺跡の接合資料を紹介しました。この遺跡は1977年に調査が行われたもので、調査が終了してから約30年も経過してからの紹介です。この資料を保管・活用している香川県埋蔵文化財調査センターの多大なるご理解があつて、今回の報告が実現したことはいうまでもありません。関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。大野は松山・今治発見の盾形埴輪について、その詳細を報告しています。大野も指摘していますが、盾形埴輪に共伴する関連資料についても、より詳細な検討を必要とするでしょう。さらに製作技法を体系づけた論証も必要だと感じました。山内は1977・1978年に確認された埴輪資料を報告しています。埴輪が出土した治平谷11号墳は今治市教育委員会によって調査が行われたもので、山内の報告は関係した皆様のご理解によるものです。ここでも多田のケースと同じく、関係者の温かいご配慮がありました。ここで山内は報告の中で今治平野の類例と比較し、さらには松山平野の動向もふまえた研究手法の構築を試みています。岡田は愛媛県内の経塚について、その集成作業の過程における研究ノートを記しました。県内の経塚資料についてはその資料の性格上、情報が限られていることは否めませんが、今後の調査研究に期待できる分野です。

(多田)

---

(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

## 紀要愛媛

第6号

平成18(2006)年3月31日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター  
〒790-8570 愛媛県松山市衣山四丁目68番地1  
TEL (089)911-0502 FAX (089)911-0508  
印刷 アマノ印刷株式会社

---